

フランドールの旅

めそみや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日唐突に外に出て幻想郷を歩いて回る事に決めたフランドール。

幻想郷を旅しながら関わる人々や光景によって少しずつ変わっていく、そんな彼女の物語。

<https://img.syosetu.org/img/user/206025/68554.png>

原作のフランちゃんの供給が少なすぎるので腹が立って書き始めました。時系列は、書籍の智霊奇伝後となっています。読んでなくても殆ど話に出ないので多分大丈夫で

す。
ちなみに P i x i v でも載せてます

目次

旅の始まり	1
迷える吸血鬼、導く人間	12
宵闇に咲く永遠	25
お月見吸血鬼	38
蓬萊の呪い	52
吸血鬼の初登山	65
神坐す山	78
昼夜逆転に挑んだ吸血鬼	92
おんぶと天啓とそれと鬼	106
拳は最良の言語なり	121
第一次鯨吞亭アルコール大戦	136

旅の始まり

外に出よう。

紅魔館の主の妹であるフランドールは唐突にこんな事を思い付いていた。

普段は外に出ようなどという事は一切考えず、また館から出させてもらえない訳でもなかった彼女であったが、どういう訳かこの日は、滅多に思う事の無かった考えが浮かんで来たのである。

思い付いてからの彼女の行動は早かった。

部屋に掛かっていた鍵を無理矢理壊し、その前ドアを開き外に出る。

「なんでも壊せるのにわざわざ鍵を掛けるなんて、意味が無いってことがまだ分からないのかしら」

館の住民に対して呆れながらも、鍵を壊した事に何かを感じる事も無く、彼女は地下の階段を登って行った。

「外に出たたって？　また随分と珍しい事を言うわね」

そう言って驚きながらフランドールを見るのは彼女の姉であるレミリアであった。

「もしあんたが本気で外に出る気なら、私に言わないで無理矢理出て行くとばかり思ってたわ」

「いつかそうやって出ようとしたら、パチュリーに雨降らされたからね。不本意だけどお姉様には言つところと思つたの」

ああ、そんな時もあったなあと紅霧異変が終わつて少ししたばかりの時を思い返していたレミリアだったが、ふと我に返る。

「だから私に許可を貰いに来たと。だからといって出す訳ないでしょう。大体、あんたが外に出たたって何をするつもりなのよ」

レミリアはフランドールに向けて当然の疑問を投げかける。何せ、普段外に出たいなどとは殆ど言わないし、彼女が何を思つて外に出たがるのか単純に興味があったのだ。

「別に、外に興味が湧いただけよ。ただ外を見て回りたいって思つた。本当にそれだけ」
彼女自身、自分がどうして外に出たいと思つたのかまだよく分かつていない。ただ、外から来た人間や妖怪に刺激されたことが少なからず原因になっているのは間違いない。無かつた。

しかし、それでもレミリアは首を縦に振らない。当然だろう。元々情緒不安定気味で

何をしでかすのか分からない妹なのだ。彼女を外に出したことで起きた問題の尻拭いなど御免であった。

だが、フランドールはレミリアの反応に別段表情を変えることもなかった。

「どうせそんなことだろうと思つた。別に最初から期待なんてしてないわよ。勝手に出てこうとしたらお姉様が可哀想だと思つたからね。一応言つてあげただけよ」

そう言つて彼女は立ち上がる。その目はすでにレミリアではなく、紅魔館のエントランスに向いていた。

「話を聞いてなかったのかしら。さつき出すつもりはないと言つたばかりよ」

声の調子を落とし、少し怒気を孕みながらレミリアは指を鳴らす。

刹那、彼女の後ろに紅魔館のメイド長である十六夜咲夜が現れる。

「はい、ただいま」

「咲夜、パチエに雨を降らすように伝えなさい。あと、これから汚れるだろうから掃除と着替えも頼むわよ」

承知致しました、と言う返事の瞬間、咲夜の姿が消える。これで数分もすれば紅魔館周辺に雨が降るだろう。

吸血鬼の弱点は多くあり、その中の一つである流水を用いてフランドールを館から出さないつもりなのだ。最も姉であるレミリアも同様に吸血鬼なのでこの方法は彼女に

とつても忌々しい物である。要は、そんな方法を取らざるを得ない程の緊急事態なのだ。

レミリアからすると、フランドールのせいで博麗の巫女や胡散臭いスキマ妖怪に目を付けられるよりフランドールと暴れる方がましなのである。

「さて、面倒だけど遊んであげる。姉として、少しは妹の世話ぐらいしてあげないとね」
小さな身体から想像も付かない悍しいほどの妖気を溢れさせるレミリアの目は既にフランドールに焦点を向けていた。

既にエントランスに向かって歩いてフランドールはその言葉を聞き、動きを止める。そうしてゆつくりと振り返った彼女の表情は歪んだ笑顔で満ちていた。

「ふっ……。まさか、お姉様がこんな魅力的なお誘いをしてくれるなんて思っても見ませんでしたわ」

途端、フランドールからも、強者たるに相応しい妖気を溢れさせる。

両者の妖気により、多くの妖精メイド達は恐れ、逃げ惑い、またある者たちは腰を抜かしてその場から動けないでいた。

そしてその妖気が限界まで高まった時、ふとフランドールが妖気を止めた。

「……でも止めとくわ。今日はそんな気分じゃないのよ」

婉容な微笑を浮かべながらもフランドールははつきりとレミリアの誘いを拒否した。

「え?」

レミリアは冷や水を浴びせられた様な表情をしながらフランドールの言葉を未だに信じられないでいる。

「えっ、今なんて言った? ちよつともう一回言つてよ」

「……何をそんなに驚いているのか分からないけれど、今日はそんな気分じゃないからやらないつて言ったのよ、お姉様」

信じられないのも無理はないだろう。何せ、フランドールは何かあれば、いや何もしなくても襲いかかってくる時があるような凶暴極まりない性格であった。その彼女が気分だからやらないというのは、天地がひっくり返っても起こらないような事なのである。きつと誰に言つても信じてもらえないだろう。

「フラン、あなた頭でも打つた?」

「あら、随分面白い冗談を言うのねお姉様」

「とぼけないで。まさかあんたがこんな事言うなんてね、一体どういう風の吹き回しかしら?」

「だから最初から言ってるじゃない。私はただ外を見て回りただけ、今はそれが私にとって一番魅力的な事だつてね」

フランドールの返答はレミリアにとっていまだ釈然としないものであった。

訝しむレミリアを余所に、フランドールは何度も同じ事を言わせる姉に少々呆れながらも話を続ける。

「ついこの前の怨霊騒ぎの時、人間だの地底の妖怪だのが外から入り込んで来たでしよう？ あの連中を見てたらね、外にはあの連中みたいにもっと面白い事があるんじゃないかって興味湧いた。私はただ純粹にそれが見てみたいだけよ」

彼女の言葉にレミリアは思う所があった。

思えば、彼女とここまで真剣に話し合ったことも殆どなかった。お互い、対して干渉もせず、自分達の思うがままに生きてきた。故に、姉妹であったとしてもお互いの事など殆ど理解してこなかったのである。その結果がこれだ。力のままに暴れる事を好んだ彼女がそれを拒むまでに至ったのにも関わらず、それに全く気付くことが出来なかったのだ。

「くくっ……、あつははははは！」

度重なるイレギュラーによるものなのか、レミリアは何故か笑いが込み上げてきた。

「急に馬鹿みたいに笑い出して……。怨霊にでも取り憑かれちゃった？」

「フラン、あなたの方も随分と面白い冗談が言えるようになったのね」

「心外だね。お姉様と一緒にしないでほしいわ」

さて、と少し落ち着いたレミリアは暎夜の名前を呼ぶ。と同時にレミリアの後ろに暎

夜が現れる。

お呼びでしょうかと颯爽と現れた彼女の顔は、穏やかな微笑みを浮かべながらもどこか満足げな嬉しげな表情が感じられた。

「咲夜、悪いけどパチエに雨を降らすのを止めるように伝えてくれる？ あと、フランの外出の身支度をしてやってほしいわ」

レミリアの言葉に、フランドールがぴくりと動いた。

フランドール本人も、まさかこんなあつさりと外出が許されるとは思ってもなかったのだらう。案の定、彼女の表情には驚愕と困惑が入り混じったような感情が少しばかり浮かび出ている。

しかし、本来なら驚くであろうレミリアの言葉を受けても、咲夜は一切表情を変えなかった。

「ええ、お嬢様、私は初めからパチユリー様の所になど行っておりませんよ」
「え」

さらりと主の命を破った事を暴露した咲夜に何となく複雑な気持ちを抱くレミリア。そしてさらに咲夜は追撃を加える。

「これを見越してましたので。その証拠に、既にフラン様の身支度を済ませておりますわ」

「……あなたが優秀なのは知ってたけど、流石に此処まで手際が良かったつけ？」

「主が考え付くを事を先に汲み取るのもメイドの仕事ですわ」

「屁理屈言っちゃって……。どうせ私がフランに一本取られる方に賭けてたのが本音でしょ」

「ばちこんと主に向けてウインクをする咲夜とそれを何とも言えない表情で見つめるレミリア。2人の主従による漫才の様なもの、暫くの間続いたのであった。」

「フラン、外に出るからにはくれぐれも余計な面倒は起こさないようにしなさいよ」「くどいわ。お姉様だって人の事言えないでしょう」

レミリアのあまりのしつこさにフランドールはそろそろ苛立ちを覚え始めた。ただ、ここで暴れると今まで耐えてきたものが水の泡になると思い、再び我慢を重ねる。

レミリアの心配は最もである。本来、紅魔館を統べる者として紅魔館が不利になるような状況には絶対にしたくないものである。しかし、今回リスクを負ってまでフランドールの外出を許可したのは、姉としてのなげなしの情を以って彼女を信じる事にしたからだ。姉としての情を思い出させる程、フランドールの言葉はレミリアにとって重

く響くものであった。

ふと思いついたかの様に、フランドールは咲夜を見る。

「まさかあの小心者の咲夜がお姉様より私を優先するなんてね。ちよつと驚いたのよ？」

咲夜は主であるレミリアに完璧に忠誠を誓っていると思つていたので、妹であるフランドールの方を優先した事は、フランドールにとつてはかなり意外だったのだ。

「怨霊騒ぎの時に、私の事を信じて下さったのはフラン様だけでしたからね。至らないものであるとは思いますが、どうか私めの感謝としてお受けとつて下さい」

「そんなに気にする事でもないのに。咲夜も物好きねえ」

私も途中までは信じてたのにと拗ね始めたレミリアを宥める咲夜との会話もそこそこ、フランドールは前を向いた。

メイド達が開き始めた扉から、吸血鬼の大敵である日の光が溢れ始める。

鬱陶しさと同時に少しの興奮という相反する気持ちを抱えながら、彼女は日傘を開いた。

そしてとうとう彼女は、太陽の登る紅魔館の庭園へと一步を踏み出す。

庭園を抜け、門に着くとそこには、背が高めの赤髪の女性が立っていた。

「あれ？ フラン様、どうかしましたか？」

そう話しかけてきたのは、紅魔館の門番である紅美鈴だった。

吸血鬼なら本来寝ているはずの時間に一人で外に出ていることを珍しく思っているようであった。

「500年くらいも休んでいたからね、お外に散歩でもしにいくのよ」

と言つて、フランドールは美鈴を大して気にも掛けず門を抜けていく。

対して美鈴は、開いた口が塞がらないと言つた表情で何を言うでもなく、ただフランドールが紅魔館から離れていく姿を見つめていてしかなかった。

紅魔館内の大図書館にて。

「レミイ、本当に行かせてよかつたの?」

レミアアの友人であり、紅魔館の知識人であるパチュリー・ノーレッジは、フランドールの外出を許可した事に少しばかり疑問を抱いていた。

しかし、レミアアはもう後悔などしていなかった。それに、妹を信じたことでどんな変化が起こるのか、少しワクワクしているのだ。

「なあに、あれでも私の妹だからね。そんなじよそこらの野良妖怪なんて相手にならないよ。まあ、どっかしらでやり過ぎるのは心配だけだよ。今はそういうのに興味無さそう

だし、取り敢えずは大丈夫だと思おうわ」

ふーんと何処か釈然としない様子で返事をするパチユリーであったが、深く追求する事はなかった。

そうして、その話題に興味を失ったかのようにすぐさま本を読むのに集中し始めた。

そんなパチユリーの様子を見て静かに笑うレミアであったが、暫くすると彼女もまた、友人と一緒に本を読み始めていた。これからの変化に胸を躍らせながら。

「さて、何処に歩いて行くのか」

迷える吸血鬼、導く人間

季節は夏。ましてや日盛りの真っ只中であるが為に、太陽を好まない妖怪はおろか、人間でさえもその日差しに飽き飽きしていた。

無論、フランドールも例外ではない。それどころか、太陽が大きな弱点の一つである吸血鬼にとつてはこの状況は最悪にも等しいものであった。

しかし、フランドールは歩みを止めなかった。

時より当たる日の光に体を焼かれる痛みや夏の暑さによる不快感よりも、彼女の周辺の風景は、それ程までに彼女に刺激を与えるものであった。

ただそれも束の間。時が経つにつれて彼女を襲う不快感は段々と大きくなっていく。当てのない散歩を楽しんでいる訳だが、こうも日差しが強いと、何処かで涼まなければならなくなるのは時間の問題であった。

「……外に出る季節間違ったかもね」

そう一人で呟きながらも、彼女は一休み出来そうな場所を探す。

幻想郷の地理を殆ど知らずに一人が出てきてしまったが為に、どこに向かえば良いのか分からないのだ。

暫く歩いていると、フランドールはある深い森に目をつけた。

そこは魔法の森と呼ばれる物で、木々達によつて日光が殆ど届かないという森であつた。

日光と暑さを凌ぐ目的でその森に入ると、そこはフランドールにとつて思つたより快適な場所であつた。

本来、瘴気に耐性を持たない普通の人間がこの森に入れば、息をするだけで体調を崩してしまふ。妖怪もそれ程までとはいかないが、好んで足を踏み入れる場所でないことは事実である。

しかし、森全体に漂う瘴気の鬱陶しさを除けば、地下暮らしを続けてきた彼女にとつてこの森の雰囲気は別段嫌なものではなかつた。

暑さと日光を凌げたことで気分が落ち着いてきたフランドールは、森の中を見渡す。

一様に生い茂る樹木や化け物草、足元に生え広がるシダやコケと言つた植物。

目に映る全ての物がフランドールにとつては初めて見る光景であつた。

館に籠りつばなしで、自然と触れ合う機会など殆どなかつた彼女であつたが、今まさにその自然に触れ合うことを心から楽しんでいた。

そのまま暫く歩き続けていると、森を抜けた。

森を抜けた先には一本の小道があり、少し先にある階段へと続いていた。

階段があるということはこの先に何か建物があるのだろう。そんな期待を抱きながら、フランドールはその道を歩み始めた。

「あくあつついわく。ねえ魔理沙、あんた涼しくなる魔法とか使えないの？」
「それが出来たらこんな所までお茶をたかりに来るわけないぜ」

そうお互いに愚痴をこぼしながら博麗神社の縁側に寝転んでいるのは、博麗の巫女である博麗霊夢とその友人である霧雨魔理沙であった。

この暑さにうんざりしているのは、これまでに数々の異変を解決してきた2人であっても例外ではなく、ただ怠けるばかりである。

すると何処からともなく、階段を登り、神社の境内に入ってくる音が聞こえた。

「参拝客か？ 随分と珍しいな」

「こんな暑い中わざわざ来るなんて、何かあったのかしらね？」

来客を見に行くために、2人は靴を履いて、参道へと足を運ぶ。

参道を見ると、そこには此方に向かって歩いてくる1人の小さな少女の姿が見える。

日傘を差していたためにレミリアかと思った2人であったが、すぐに別人であること

に気が付いた。

レミリアの妹であるフランドールであった。

フランドールは2人に目を向けると、まるで何か面白いものでも見つけたかのように微笑む。

「おまたせ」

「呼んでないわ(ぜ)」

冗談よと言いがらくすくと笑うフランドール。

しかし、2人は彼女が外に出ていることに驚きを隠さないでいた。

「妹君じゃないか。外に出るなんてどうしたんだよ」

「出たいと思ったから出ただけよ。特に驚くことでもないでしょう?」

別段変わった様子も見せずに質問に答えるフランドール。

しかし、2人の疑問は未だ消えることはなかった。

「それで、あんたは何しに此処に来たの? 神社を壊すなんて事したらどうなるか分かっているでしょうね」

「欲しいなら壊してあげるよ?」

「んな訳あるか」

まあいいわと霊夢が話を切る。これ以上外で話をしてはいたくなかったのも相まって、

霊夢はフランドールを家に入るように促した。

フランドールが外に出ている事実には未だ困惑している魔理沙であったが、ここで考えていもうかがないと思ひ、2人に付いていくことにした。

フランドールは家の中に入るや否や日傘を畳み、部屋を見渡す。

「ふーん、和室ってこんな感じなのね。結構変わってるじゃない」

そう言いながら彼女は畳やちやぶ台の手触りを楽しんでゐる。

そんな彼女の様子を見ながらも、霊夢は未だに彼女の目的が分からないでいた。

「あんた、何で外に出てるの？ 普段はレミリアがあんたを出さないようにしてゐるって聞いてたけど、その様子だと別にこつそり抜け出してきたとかいう訳じゃないんでしょ？」

「さつきも言ったでしょう？ まったく、幻想郷って何度も同じ事を言わないといけない所なのかしら」

「あんたが何言ってるのか分からないけど、取り敢えず、特になんかしかすつもりはないようね」

それに対して笑顔を向けることで答えるフランドール。

続けて魔理沙もフランドールに疑問を投げかける。

「じゃあなんだ？ ただ散歩でもしてたつてののか？」

「その通り。そんな程度に過ぎないよ」

椅子はないのねと言いながら、フランドールは畳の上にちよこんと座りはじめた。そうして博麗神社まで来た経緯を話し始める。

「それで、この神社に来たってわけね」

「まあなんだ。つまり、何処に行こうか決めもせず迷った挙句、こんな所に来てしまったと」

「迷ってなんかいないわ。まあ大方それで合ってるけど」

そう言ってフランドールは眠たげにあくびをする。

すると、ふと何かに気が付いたかの様に顔を上げる。

「ちようど良いわ。幻想郷について教えてよ。そうすれば、少しは歩きやすくなるってもんだわ」

フランドールは2人に向けて幻想郷の地理について聞くことにした。当てのない散歩を楽しむのも良いが、何かあったときに土地勘が無いと困ると考えたのだ。

すると、突然霊夢が部屋の奥に入ってしまった。

ガサゴソと音を立てながら何か探してる様である。

「あつたあつた」

そう言いながら霊夢は見つけたものを此方に持ってきた。

それは相当古い物らしく、所々文字が掠れている。どうやら地図であるようだった。

「霊夢、それは何だ？」

「幻想郷について書いた、言わば地図のようなものね。結構古いものだけど、何処に何があるのか説明するのならこれで十分でしょ」

霊夢はそれを広げると、フランドールに対して説明を始める。

博麗神社は幻想郷において最東端に位置する。

神社から西へ向かうと、巨大な森林に当たる。それがフランドールが歩いた、魔法の森である。

魔法の森を抜けた先には人間の里、妖怪の山、その山の麓側にある霧の湖と紅魔館がある。

また、妖怪の山には守矢神社や天狗や河童達といった様々な勢力が存在する。

人間の里から少し離れた所には、聖白蓮が率いる命蓮寺が位置している。

また、人間の里から南西辺りに向かうと、迷いの竹林というものがあり、その中にはかつて月の住民であつた者達が住う、永遠亭が位置する。

「まあ、ざっと説明するとこんな感じじゃない？ 細かく説明するとなると結構時間か

かるし。何より、散歩したいだけなんならそこまで詳しく知る必要もないでしょ」
「ええ、十分だわ」

満足げに答えるフランドール。彼女の説明は思っていたよりもずっと分かりやすく、別段不足を感じることもなかった。

また、いくつか気になる場所を見つけたために、今後はその場所らに行こうといった目的が出来たことにも満足を感じていた。

当てのない散歩からも良かったが、目的地を作ることも悪くない。フランドールはこの外出を、気ままな散歩から目的地に向かう旅に変更することに決めた。

「ちなみに言うと、私はお前が通ってきた魔法の森に住んでるんだ」

「へえ、私には意味はないけれど、あそこ、普通の人間が住めるような場所には思えなかったけどね」

2人が雑談で盛り上がりかけてきた時、霊夢が彼女らの話を止める。

その手には先程の地図が丸まっており、フランドールに向けて差し出されていた。

「これ、いらぬからあんたにあげるわ。私にとってはただのゴミだしね。それと、用が済んだならさっさと何処かに行きなさい。2度あることは3度あるって言うように、あんたまで入り浸りになっちゃったらまた神社が壊れちゃいそうだわ」

ぶつきらばうな霊夢の言葉に軽く笑いながらも、フランドールは差し出された地図を

受け取る。

「冷たいのね。でもお断りさせて頂くわ。今はとっても眠いんだもの。ちよつと昼寝でもするから日が沈む頃に起こして」

フランドールは霊夢の指図を拒否して、完全に寝入ってしまった。

通常なら寝ていた時間に無理矢理起きていたために眠気が頂点に達してしまったのである。姉のレミリアのように、吸血鬼にとつての昼夜逆転生活に慣れていないので仕方がない事なのだ。

「あつ！　ちよつと、何勝手に寝てるのよー！」

「駄目だこりゃ、速攻で寝入っちゃった」

その後、なんとかして起こそうとするが、意外にも寝付きが良く、暫くの間一回も目を覚まらなかった。

「フランドールさん、起きてください。フランドールさん」

体を揺すられ、寝ぼけ眼で起き上がった彼女の前には見知らぬ顔があった。

「……………だれ？」

「こんばんは。この神社の狛犬の高麗野あうんです」

狛犬？ と訝しんでいるフランドールを余所に、あうんはすでに霊夢と魔理沙を呼びに行っていた。

まだ覚め切っていない頭で立ち上がり、少し歩いて顔を外に覗かせると空が赤く焼けていた。

いつかの紅い霧とは違い、まるで全てを焼き尽くさんとする炎が、空を覆っている様であった。

「あれー？ フランドール、あんた起きたのー？」

少しの間であったが夕暮れに心を奪われていると、奥の方から霊夢が彼女を呼ぶ声が聞こえる。

「おっ、起きたみたいだな。あうんが里でうどん買ってきたみたいだから食べようぜ」

まだ寝起きのフランドールを見ながら魔理沙が食器等を運んでくる。

魔理沙が運んできたものを見ると、少し太めの白い麺が置かれていた。

知識にはあったが見たことがなかったために、フランドールはうどんをまじまじと見つめている。

「さて、食べちゃいませうか。あんたもさつきと触っちゃいなさい」

そう言つて、霊夢は立ち尽くしていたフランドールに座るよう促す。

何をするでもなく、フランドールは促されるままに霊夢の隣へと座った。

「霊夢、この狛犬つてのは何？」

フランドールは、先程自分を起こしたあうんのこと気がなっていた。

「あうんのことね。何でも勝手にこの神社を守護してる守護神獣つてやつよ」

「ふーん。でも守護神獣つて割りには弱そうだけどね」

それを聞いたあうんは少し凹んでいた。

実際、あうんは決して強い部類の妖怪ではなく、ましてや幻想郷のパワーバランスの一角を誇る吸血鬼のフランドールからすれば、あうんの力はお世辞でも強いと呼べるものではなかった。

「確かにあうんは強くはないけど、他の部分で優秀だからね。今日も私の代わりにおつかいに行つてきてくれたんだから」

霊夢があうんのフォローに回ると、あうんは照れますねーと分かりやすいぐらいに喜んでいた。

食べ始めて暫くの間、4人は軽い雑談を続けていた。

フランドールがうどんを見たことがなかったことに驚く3人であったり、紅魔館の住民への愚痴のこぼし合い、魔理沙が今までに食べたパンの枚数やフランドールが意外にも和食を気に入ったこと等々。

食卓を囲んで、集団で食事を楽しむといったことは、今まで常に一人で食事をしてきたフランドールにとっては初めての経験ではあった。

「こういうのも案外悪くないのね」

フランドールは半ば独り言のように呟いた。

「そういや、お前は宴会とか一度も参加しなかつたもんな。今度の宴会はお前も呼んでやるよ」

その呟きを拾った魔理沙は、全て食べ終わり、食器を片付けに向かった。ついでに既に食べ終わっていたフランドールの食器も一緒に持っていた。

「さて、ちゃんと睡眠も取れたしお腹も一杯だから、そろそろ行くわね」

「ごちそうさまと言ってフランドールは立ち上がる。

その様子を見た霊夢は、やっと面倒が終わると言った表情でため息をつく。

「やっと行くのね。なんだかんだでこのまま神社に居座るんじゃないかってひやひやしたわ」

「素直じゃないねえ。あいつの命令でもないのに、わざわざご飯を出してくれたんだから、実はそんな事思っていないんじゃない？」

そんなフランドールのからかいであったが、はいはいと適当に流される。

流れた事にくすくすと笑いながらも特に気にする事もなく、フランドールは玄関に向

かい、靴を履く。

いざ引き戸を開けようとする、食器を置きに行っていた魔理沙が此方に戻ってくる。

「お、なんだもう行くのか。また来いよ。来た時には多分茶でも出して貰えるさ。まあ紅茶じゃなくて緑茶だけだな」

面倒を増やす様な勝手な事を言う魔理沙に怒る霊夢。いつもの事だと見守るあうん。そんな彼女達を面白げに見ながらもフランドールは扉を開く。

次は何処に行こうかと新たな期待を抱きながら彼女は歩みを始める。

「ええ、また来るわ」

去り際に、一言を残して。

宵闇に咲く永遠

宵闇が降りてくるなか、辺り一面に虫達の声が鳴り響く。

幻想郷の住民にとっても騒々しいものではあるが、夏の風物詩の1つとして受け入れられていた。

しかしながら、どうした事か所々で虫達の声がぴたりと止んでいく。まるで何かに怯えるかの様に。

フランドールの周りは常に静寂で包まれていた。

夜の森に響くのは、彼女が地を踏み締める音のみである。

博麗神社を発ったフランドールの目的は、迷いの竹林、そして永遠亭であった。

永遠亭に住む何人かは、老いることも死ぬこともない、俗に言う不老不死というものらしい。さらに霊夢の話によると、その不老不死達は肉体が完全に消失する様な事があつても、その魂を存在の起点として好きな場所に肉体を再生出来ると言うのだ。

どうやらこれは吸血鬼の再生能力とは訳が違うらしい。

妖怪は、人間の様に肉体によってそのものの存在を維持するという訳ではない。故に、人間であれば致命傷である傷であつても、妖怪にはそこまで深刻なものにはなり得

ない。傷を癒すことや戦闘によって力を全て使い果たしてしまう事が有れば話は別だが。

そんな妖怪達の中でも吸血鬼の再生能力は群を抜いていた。

頭が吹つ飛ばされない限りは、全身がどんなに酷い有様であつても一晩あればすぐに治る程である。

しかし、そんな吸血鬼であつても完全に肉体が消滅してしまえば、再生など不可能であつた。

吸血鬼をも超える存在。

その存在は、フランドールにいくら経ても冷めない興奮を与えたのであつた。

「今日はどうも森が静かだと思つたら、あんたが原因だったの」

フランドールを包んでいた静寂が、突如として1人の少女に破られた。

大して驚いた様子も見せず、フランドールは歩みを止める。

どうやらその声は彼女の背後から聞こえるようであつた。

「さあ？ 何の事だか分からないけど」

ゆつくりと振り向きながら、フランドールは妖艶な微笑みを見せた。

強者としての余裕というものなのだろう。背後を取られるまで近付かれてなお、彼女は微笑みを崩さなかつた。

普通の人間であれば、この夜の闇の為に声を掛けてきた少女が何処に居るかも分からなかっただろうが、フランドールは吸血鬼である。この暗さの中でもその少女の姿を捉えることは容易な事であった。

その少女は少しずつ此方に歩み寄ってきた。

髪はボブカットで鮮やかな黄色、白と黒で構成された洋服を着ている

「気付いてるかどうかはどうでも良いけど、あんたが出してるその妖気、虫達がびびっちゃってるし、私も全然落ち着かないから止めてよ」

その少女が言うには、森が静かな原因がフランドールの妖気にあるということらしい。

身に覚えは無かったが、言われた為に自分の周りを意識してみる。

「あっ」

言われた通りにだだ漏れであった。どうやら、垂れ流し状態で神社から歩いて来てしまったていたらしい。

妖気が溢れ出す程、かつそれに気付かない程にテンションが上がっていた事に自分でも驚く。

自分の変わりようを少し面白く思いながらも、少女の要望通りに妖気を止める。

「あーびつくりした。急にこんなのが来るんだから焦っちゃった。あんた、なんの妖怪

「？」

「人に名前を聞くときはまず自分からって言うでしょう？」

「あーはいはい、私はルーミア」

ルーミア、そう名乗った少女の周りに突然何も見えない闇が現れ始める。

その闇は、あつという間にルーミアとフランドールの2人を包み込んだ。

「こういう風に私は闇を操れるの。どう？　どんなに夜目がきいても、光を一切通さない完全な闇の中なら何も見えないでしょ？」

確かに、吸血鬼であるフランドールでさえもこの闇の中では何も見えなかった。

だか、どうやらそれはルーミアの方も同じらしく全く見当違いの方に話しかけている。

「いいねえ。これなら完璧に日光を遮れそうだわ。それに涼しそうだし」

「でしょ？　でもここは私1人の楽園だから入れてあげないけどね」

日光嫌いの話で盛り上がる2人。

少しばかり話に夢中になっていたが、フランドールはふとまだ自分が名乗っていないことに気づく。

「そういえばまだ名乗ってなかったわね。私はフランドール・スカレットよ」

フランドールの名前を聞いたルーミアは少し考えるように沈黙を続けた。

そして、突然何かに気付いたかの様に声を上げる。

「スカーレットトって……。あの真つ紅なお屋敷に住んでる……う？」

「ええ。その当主が、私の姉のレミアお姉様よ」

途端に闇が引いていく。

2人の周りにあつた闇が完全に無くなり、お互いの顔が見える。

完全な暗闇から露わになったルーミアの顔は少しばかり引き攣っている様に見えた。

無理もないだろう。幻想郷のパワーバランスの一角を成すレミアは、弱い部類の妖怪にとつては畏怖の対象と言つても過言ではない。

そんなレミアの妹なのだからとんでもない力を持つている筈である。

ルーミアはフランドールにちよっかいをかけた事を後悔しているようだった。

「ふふっ。別に取つて食べたりなんてしないわよ」

「……壊してきそうな感じはするけどね」

「よく分かつてるじゃない。今回はハズレだけどね」

ルーミアはフランドールの返答に首を傾げながらも、危害を加えられる事はなさそうである事が分かり、少し安心している様であった。

「さて、そろそろ行くわ。行きたい所があるからね」

そう言うと、フランドールはルーミアを背に再び歩み始める。道草を食ったが、彼女の目的は迷いの竹林にある永遠亭なのだ。

フランドールは、霊夢から貰った地図をもとに迷いの竹林へと向かった。

ルーミアはそんなフランドールの姿を見送った後、そそくさと森の奥へと入っていった。

「……………迷った？」

迷いの竹林なるものに辿り着き、かれこれ1時間、フランドールは同じ景色を常に見続けていた。

迷いの竹林は、その名の通り入る者を迷わせる迷宮である。

常に深い霧が立ち込めており、緩やかな傾斜があるために段々と方向感覚が狂っていく。

始めは良かったのだ。初めて見る竹林は中々面白いものであり、暫くの間は同じ景色を歩き続けても飽きる事はなかった。

ただ、流石にこうも長時間同じ景色を見ながら歩き続けるのは苦痛と化してくる。

一度竹林の上空を飛んでみたが、霧が立ち込んでいて何も見えない状況であった。

永遠亭に着くのに1時間も掛かるほどの距離は無い筈ではあったが、どうも辿り着かない。

外に出ようと思っても、同じ光景が常に続いたために出口までの道のりが分からないでいた。

辺一面、焼け野原か木っ端微塵にしようかと思ひ始めた頃に前方から人影が見え始めた。

「こんな時間に肝試しかい？ お嬢さん」

此方に近づく人影が段々とはつきり見える様になつてくる。

髪は白髪で長く、膝近くまで下ろしており、赤いもんぺの様な物を着ている少女であった。

「変わった羽だなあ。何の妖怪かは知らんけど此処はまともな奴が来るところじゃないよ。来るのはせいぜい病人が変わり者だけさ」

彼女の言い方は、どうもこの竹林を熟知しているようなものであった。

この竹林に入りながら特に焦つた様子もなく、真つ直ぐフランドールに向かつて来た事からもその根拠となり得る。

かれこれ一時間も一人で彷徨い続けていたフランドールにとって、この竹林に詳しい人物は有難いものであった。

「なら私は後者になるのかねえ。だって健康そのものだもの」

「違ういな。それで？ 健康そのものなのにこんな所で何やつてるの？」

「永遠亭つてのに行きたいのさ。不老不死が見れるつて聞いてね」

フランドールの言葉を聞き、白髪の少女は少し驚いた表情をした後に本当に変わつて
る奴だったと笑い始める。

白髪の少女が一頻り笑い終わり、フランドールへと向き直る。

一方のフランドールは、白髪の少女が笑った理由が未だに分からないでいる。

「わざわざ不老不死を見に来るとか、そんな物好きは殆どいないよ。それに、私もあんた
が探してる不老不死つてやつさ」

「え」

フランドールは、まさか自分の目の前にいる少女が会つてみたかつた不老不死である
ことに驚きを隠せなかつた。

白髪の少女は、探していた永遠亭の住人なのではないか、そうであればこの竹林につ
いて詳しいのにも納得がいく。

そう推測を立てたフランドールは白髪の少女にその事について聞いてみることにし

た。

「貴方、永遠亭に住んでるの？ それだったら辻褃が合いそうだけど」
「まさか。私はここに住む人間だよ」

どうやら違ったようだ。

永遠亭の住人では無いのに不老不死である者がいた事は想定外だったが、この様子だと永遠亭についての道のりも知っている様なので好都合であった。

すると、白髪の少女がフランドールに対して疑問を投げ掛けてくる。

「そういえば、何で不老不死に会いたがつてたんだ？ 人間が興味を持つのは分かるけど、妖怪は基本不老不死なんぞに会いたがつたりしないからな」

当然の疑問であろう。

本来、不老不死は人類の夢として常に追い求められてきた。中国での道教が良い例である。そして現在でも不老不死の夢は潰えてはいない。

一方、妖怪からすると不老不死は邪魔なものでしかない。不老不死であれば妖怪を恐れる必要もなく、かと言って食べられるようなものではない。

妖怪にとっては邪魔なものでしかないのにも関わらず、不老不死に会いたがるなど少女には理解が出来ていない様だった。

「そうねえ、一つ言うとはんとに何をしても死なないのか気になったのよ。私も吸血鬼

だからね、再生能力には自信があるのだけどそれでも無限つて訳じゃないもの。でも、何をしてもし死なないのならいくらでも再生出来るって事でしよう？ それをこの目で見たかったのよ」

「なるほどねえ。というかお嬢ちゃんは吸血鬼だったんだ。そういえばあの夜も確か吸血鬼のお嬢ちゃんが来たっけなあ」

白髪の少女は言うあの夜とは、幻想郷内では永夜異変と呼ばれる異変が起きた後の夜である。

その異変は、事態をよく知らない者達にとつてはただの夜が明けないという異変であつたらしいが、本来は永遠亭の者達によつて月がすり替えられるというものであつた。

「それで、私の再生が見たいんだっけか」

白髪の少女は、ふと本来の目的に話題を戻してフランドールに聞く。

「ええ。もちろん」

フランドールの返答を聞いた少女は、突如にやりと笑い彼女を見つめる。

そして少女は、フランドールを煽る様な挑発的な態度を取り始めた。

「なら力尽くでやってみな！ 久しぶり暴れてやるよ！」

途端、少女は飛び上がる。

月を背に舞い上がる少女の周りは紅蓮の炎に包まれる。少女の周りの炎は段々と形を作り、いつしか羽と呼べる様なものとなった。その様子はまさしく鳳凰そのものであると言えよう。

大抵はその光景に恐れを成して逃げ出すか、余りの神々しさに感嘆の声を上げて見惚れてしまうかのどちらかであろう。

しかし、フランドールは違った。

絶対的な強者としての余裕は持ち続け、艶やかな微笑みを崩す事は無かった。

「貴方は立場を理解してない。試すのは貴方では無く私の方だつてことをね！」
フランドールはそう声を上げると同時に右手を握り締める。

瞬間、鳳凰を纏った少女の体が爆散する。

少女だった肉片は空中で四方八方に散らばり落ちていく。

その様子をフランドールはただ見つめるだけであった。

数分経つても何の変化も無かった。

依然として少女の肉片は地面に転がったままであり、特別何かが起きる事は無かった。
た。

「やっぱり、何をしても死なないなんて事は無かったわね」

一人呟きながら、フランドールの不老不死に対する興味は完全に失われかけていた。

帰る方法聞くの忘れたなどという事を考えながら、フランドールはその場から背を向
き歩き始めた。

すると、様々な場所に散りばめられていた肉塊達が一齐に消えていく。

「……なに？」

フランドールが驚き、後ろを振り返ると、少女が爆発した場所に猛々しい炎が咲いて
いた。

炎は徐々に勢いを弱めていき、同時に炎の中心に人影が形作られていった。

まさかと思ったフランドールはその様子を見続けた。

そうして炎が完全に鎮まった時、炎の中心で燃え続けていた人影は何事も無かったか
の様に、地面に降り立った。

「お嬢ちゃん、あんた一体何をしたんだ？」

そうフランドールに尋ねた人物は先程の白髪の少女であった。

「驚いた。壊れても勝手に直るなんて初めてみたわ」

「それはこっちの台詞。急に私の体が爆発したんだもの、何が起きたのか全然わからな
いよ」

お互い何が起きたのか理解出来ず、暫く2人で見つめ合っていた。

しかし、このままだと埒が開かないと思ったのか、白髪の少女はフランドールに声を

掛ける。

「なあお嬢ちゃん、名前はなんて言うんだ？」

「あら、人に名前を聞く時はって言うでしよう？」

「あー、そんな言葉もあつたけな」

少しはがり面倒くさそうに頭を掻きながら、一呼吸置いて少女はフランドールに目を向ける。

「妹紅。私の名前は藤原妹紅だ」

お月見吸血鬼

深い霧がかかる竹林。完全な静寂で包まれたそれに2人の少女の姿があった。

「ほれ、ちゃんと先に名乗ってやったんだからお前の名前も聞かせな」

藤原妹紅と名乗った少女は、今度はフランドールに名乗るよう促し始めた。

「どうやら彼女は、自らを簡単に殺してみせたフランドールに興味を持ち始めた様であった。」

別段断る理由もないためにフランドールも名乗る事にする。

「私はフランドール・スカーレット。その紅い屋敷に住んでいるわ」

「ああ、あの趣味の悪い屋敷か。という事はあの吸血鬼の嬢ちゃんと姉妹かなんかって訳か」

フランドールは、姉や紅魔館の事が思ったよりも知られている事実を少し意外に思った。

今まで外に出ずに過ごしてきたために外の勢力図を知らない事もそうであるが、いつも運命だのどうだの適当な事を言っている姉の事もあるために、紅魔館がそこまで大きな存在であるとは思っていなかったのだ。

しかし、道中で会った闇を使う野良妖怪も姉達の事を知っていた事からも、紅魔館は幻想郷内でもかなりの影響力を持つ存在であるという事が分かった。

あいつも思ったよりやるのね、と少しばかり姉を見直す。

「そういうレミリアとか言ったっけな、あのお嬢ちゃんは」

「そうよ。レミリアお姉様」

ああ妹か、と納得したような表情であつた妹紅だが、ふとフランドールの当初の目的を思い出した。

「そういうえば、お前永遠亭に行くんだっけ。案内してやろうか？」

その誘いを聞いたフランドールだったが、当初の目的を思い出すと永遠亭に行く必要が無いことに気付く。

不老不死の存在を確かめる事が目的であつた為に、妹紅との一連の出来事でその目的が既に済んでしまったのだ。

永遠亭自体に興味を持っていた訳では無かったので、永遠亭に行く理由はもうない。

フランドールはその事を妹紅に伝える。

「そうかい、じゃあ外まで送ってくよ。どうせ迷ってたんだらうしな」

妹紅の案内を受け、竹林から出ようと歩き始めた所で1人の足音と共に此方に話しかけてくる声が聞こえた。

「あー妹紅……と見ない顔ね」

そう言つて此方に歩いてきたのは、笠を被り、背中に大きな籠を背負つた少女の姿であつた。

「鈴仙ちゃんか。薬売りにしては随分遅い時間じゃないか」

「色々あつてねえ、これじゃお師匠様に怒られちゃうわ」

どうやら2人は知り合いのようである。

また、薬売りの帰りと言う事やこの竹林を迷つた様子もなく歩いて来たという事もあり、此方にやってきた少女がこの周辺に住んでいるのは容易に想像できた。

妹紅に関してもこの竹林に住んでいると聞いたので、知り合いなのも住んでいるのが近所だからなのだろう。

「それで、こつちのちつちやいのは誰？ 人間じゃないのは一目で分かるけどさ」

笠を被つた少女は、フランンドールに目を向けて妹紅に聞き始める。

「フランンドール。あの紅い屋敷に住む吸血鬼の妹だつてさ」

「へーあそこの吸血鬼のか。妹なんて居たんだ、全然知らなかつたわ」

鈴仙と呼ばれた少女は暫くフランンドールを見ていたが、段々と眉を顰めていく。

フランンドールは、何故そんな表情をされるのか分からないでいたが、特に気にする様子もなく、2人の話を聞き続ける。

「貴方、波長がちよつとおかしい様な……? 結構長めかと思つたら実はそうでも無さそうだし……」

笠を被つた少女は、フランドールに向かつて何やら喋っているようであった。

完全に意味は分からなくても、決して褒めている訳ではない事は理解できる。

「ふふつ、失礼ねえ。私は至つて普通だけれど」

フランドールは、訝しげに思っている少女に微笑む。

失礼のお返しに少し脅かしてやろうと思つて、少女の被る笠の『目』に狙いを定め握り潰す。

「うわっ!」

少女の叫び声と共に笠がバラバラになつて弾け飛ぶ。

少女は何が起こつたか分からず、辺りを見渡し始めた。

「えっ? 何で私の笠が爆発したの?」

「それだ! さつき私を殺したやつ!」

少女が、余計に訳が分からないといった表情で妹紅を見つめる。

妹紅の方は、フランドールが少女の笠を破壊した事に興味津々であるようだった。

妹紅はフランドールに対して、自分を殺した時の事も併せて説明しろと迫る。

フランドールは、いつか天狗が来た時も同じ様な事を聞かれたのを思い出しながら、

彼女の質問に答える。

「全ての物には『目』って言う物があつてねえ。そこを潰しちゃえばドーカンと爆発するのよ。え？ どうやって目を潰したかつて？ 私の手の上に既にあつたのよ。私の力はあらゆる物の「目」をこの右手の上に存在させるものだもの」

一通り説明し終えたが、2人ともまだ良く分かつていないようであつた。

2人は少しの間考えていた様であつたが、多少納得したかの様にフランドールに尋ねる。

「簡単に言うと、つまりお前の力は何でも壊せるつてことか？」

「そうそう。貴方はあの烏天狗より物分かりが良さそうね」

2人は、フランドールの力を何となくだが理解した事に少し満足していたが、笠を被っていた少女は、思えば自分の笠が壊されたことに気付き、慌てた様な怒った様な表情に変わる。

「あなたの力が分かつたのはいいいけど、私の笠を壊した事はどうしてくれるのよ！これじゃあ師匠に2倍増しで怒られちゃう！」

「別にそんな怒る程でも無いだろ。また新しいの買えばいいんだよ」

妹紅がその少女を宥めている様であつたが、その焦りや怒りは少しも収まりそうに無かつた。

すると、突然少女が妹紅とフランドールの腕を掴み、走り出す。

「おいおい、どうしたよ鈴仙ちゃん」

「笠壊した張本人を連れてっってお師匠様のお仕置きを回避するの。あんたはその証人」

「だってさフランドール。お前は どうする？」

「人に引つ張られながら移動するのは初めてだからねえ。せいぜい楽しんでおくわ」

能天気な奴等めと舌打ちをしながらも少女は走る速度を緩めなかった、それどころかどんどんと加速していく。

フランドールは、流れに身を委ねるつても悪くないと思いながらも目まぐるしく変わる景色を楽しんでいた。

ふと妹紅の方を見ると、彼女も大して気にしている様子はなく、フランドールと同じように身を任せたままであった。

「へえ……これが永遠亭ね」

3人は永遠亭と呼ばれる巨大な屋敷の前に立っていた。

どういう訳か屋敷の周辺は霧が晴れており、月明かりが覗いている。

竹林に囲まれ、唯一月明かりが当たるその屋敷は、何処かこの世のものでは無いかの
ような、そんな幻想的な印象を受ける。

博麗神社にて初の和室を体験したフランドールであったが、この永遠亭の大きさはそれとは比べ物にならない程巨大な物であった為に少しばかり見惚れていた。

「なあ鈴仙ちゃん、永琳のお仕置きって言ってもそんなにきつい訳じゃないだろ？ 落ち着きなつて」

「耳を掴まれて振り回されるのが痛くない訳無いじゃない。出来る事なら二度とやられたくないわ」

彼女の意思は固いようで、2人を連れて屋敷の中へと入っていく。

2人は、彼女に付いて永遠亭内を歩いていると、フランドールがある事に気付く。
前を歩く少女の頭には、人間には無い大きな耳が付いていたのだ。

「………兎？」

フランドールがそう呟くと、その呟きを妹紅が拾う。

「そうそう。鈴仙ちゃんは月から来た兎なんだ」

妹紅の話を聞いたフランドールは、いつか姉達が月に行ったという事を思い出した。

姉が向かうくらいなので月には何か面白い物があるという事は想像がついたが、こうして月から来たという少女に実際に会ってみると、姉が月に興味を持った事は何ら不思議

議では無いことが分かる。月に文明が存在すると知れば気になるのは至極当然の事だ。

そうこうしている間に、目的の部屋に着いたようであった。

兎耳の少女が失礼しますと言って戸を開ける。

開けた部屋の奥には、一人の女性が何かの液体が入った試験管と睨み合いをしているた。

腰まで届く程の長い銀髪を三つ編みで纏めているその女性は、部屋に入ってきた三人に気付くと、試験管を置いて此方に近づいて来る。

「ああ、ウドンゲ。随分遅かったのね。そっちは妹紅と……患者の方？」

「私の笠を勝手にぶつ壊した方です」

私はその証人だつてさ、と妹紅が説明を続ける。

「言われてみると確かに笠が無いわね。それで、そこのお嬢さんが貴方の笠を壊したつて？」

銀髪の女性がフランドールに視線を移す。

兎耳の少女の苛立ちや不安そうな表情を見るに何かあった事は察している様だが、フランドールが笠を壊したという事については理解が出来ていない様である。

「壊したつて言つてもねえ。この兎が急に失礼な事を言ってくるもんだからちよつと脅かしてやつただけよ。私は至つて普通にしてるだけなのにねえ」

「いまいち何が起きたのかよく分からないけど……その鈴仙が、貴方に何かしたって
いうのだけは分かったわ」

段々と場の雰囲気自分が自分に良くない方向に向かっているのを察した兎耳の少女は、一
段と焦りを感じている様で、必死で言い訳を考えていた。

私は何もしていないんです、夜遅くなったのも色々ありまして等々。

口は災いの元と言われるものだけあり、言い訳をすればするほど彼女の墓穴は増え続
けた。

「遅くなったのはまた別として、患者でもない人を無理矢理連れて来るのは良い事とは
言えないわね」

そう言うと、銀髪の女性は少女の兎耳を掴む。

少女は一瞬で顔が青ざめ、涙目になるがその女性は耳を掴むのを止めるどころか、戸
を開けて、何処か奥の方へと少女を引き摺って行った。

少女の泣き声だったり呻き声だったり聞こえていたが、暫くすると聞こえなくなっ
た。

少女の声が聞こえなくなっただけからおおよそ一分くらいで、先程の女性が此方に戻っ
てきた。

「悪いわね。私の弟子はまだまだ未熟だから、許してやって頂戴。まあ、折角来たんだ

し、お茶でも出すわよ。鈴仙が無理矢理連れてきた償いも兼ねて」

まあ、貰えるなら貰っておこうとフランドールはその提案を二つ返事で受け入れる。妹紅の方もフランドールと同意見な様で断る様子は無かった。

妹紅とフランドールは、永遠亭の縁側で月を眺めながら茶を飲んでいた。

フランドールにしては、たまに紅魔館から月を眺める事はあったが、こうして誰かと共に月を眺めることは思い出す限りは無かったと思う。

神社で霊夢達と食事を共にした時もそうであったが、誰かと共に行動するというのはフランドールが思っていたよりも案外悪くないものであった。

人間を襲う妖怪が、人間と仲良く食事をするというのも滑稽な話であったが、ある意味で人間と妖怪が対等なこの幻想郷では、それ程気にするものでもないのだろう。

「あら妹紅。いつの間に来てたの?」

突然、背後から声が掛けられる。

2人が振り向くと、絶世の美女と呼ばれるに相応しい少女の姿があった。

「あつ!輝夜!お前の方こそいつの間にな!」

輝夜と呼ばれた少女は妹紅の隣に座るフランドールに目を向ける。

「あら？ 見ない顔ね。妹紅のお友達？ 珍しいわねえ、妹紅が誰か連れてくるなんて」

「連れてこられたのは合ってるけど、生憎、連れてきたのは貴方の所の兎なのだけだねえ」

「じゃあイナバのお友達？」

「寧ろ嫌われてるかも？」

輝夜と言われた少女が言うイナバとは、先程の兎耳の少女である鈴仙・優曇華院・イナバの事であろう。

彼女の名前は、彼女の師匠である八意永琳から聞いたものである。

弟子の非礼の詫びにとお茶を入れてくれた時に、ちょうど良い機会であるからと2人の名前を聞いたのだ。

「そういえば、さつき妹紅が貴方の事を輝夜って呼んでいたけれど、どつかで聞いたことあるような？ 何だったけ、竹取物語のかぐや姫とか言ったような？」

いつの日か、いつも通り何もする事が無かったので、図書館に行つて適当に本を漁っていた時があった。

その時、気まぐれで手に取った本が恐らく、竹取物語という古い話の本であった事を覚えてる。

姉達が月に行っていた時であったので、同じ様に月の話題が出てきたことから何となく関連付けて覚えていたのであった。

「ああ、それ私ね」

「……………？……………本人？」

一瞬、その少女が何を言っているか分からなかった。

流石のフランドールでも、本の主人公が目の前に居るなんて状況は、理解が追いつかなかった。

暫くの間考えを巡らせていたフランドールであったが、幻想郷だしそんな事もあるだろうとすぐに受け入れて、冷静になる。

幻想郷だからというの、これからにおいても役に立ちそうな言葉である予感があった。

「かぐや姫ってことは、貴方はお姫様ってやつ？」

「ええ、そうよ。私は輝夜、蓬莱山輝夜」

「あら、お姫様からどうもご丁寧に。私はフランドール・スカーレット。その紅魔館の吸血鬼よ」

「あそこの紅い屋敷ね。確か前にも行ったことあるわ」

すると突然、妹紅がフランドールと輝夜の話に割って入る。

「おい、輝夜。今日は色々あつて消化不良なんだ。ちよつと殺し合いに付き合え」
そう言つて彼女は立ち上がり、勢い良く外に飛び出す。

妹紅は、ある程度離れると早く来いだのと色々騒ぎ始めた。

「そういえば、最近は一切やつてなかつたわねえ。まあ、運動不足は良くないし、仕方がないから付き合つてあげましょうか」

また後でゆっくり話しましょうかとフランドールに微笑みながら輝夜は妹紅のもとへと飛び立つていった。

妹紅と輝夜の2人による、激しい弾幕の嵐が夜空に舞っていた。

永遠亭を照らす2人の光が夜空に咲き乱れる様子を見ると、どうにもこの世のものは思えないような美しさであった。

フランドールにしてみれば、他人同士の弾幕遊びは初めて見るものであった。

弾幕の美しさをも競う決闘法とされているが、当の本人達はその美しさを中々楽しめるものではない。

かく言うフランドールも例外ではなかつた。

弾幕を打ち、避け合うのみに夢中になり、美しさを楽しむほど周りを見る余裕は無かつたとフランドールは思う。

こうしてこの弾幕遊びを客観的に見る事は、その美しさを充分堪能出来るものである事にフランドールは気付いた。

「……外を出てから気付かされる事ばかりねえ」

一人頬杖をつきながら呟く。

まだ外に出て1日も経っていないというのに、色々な事を体験しすぎた為に、少しばかり疲れを感じるが、別段気にするほどでもなかった。

なんだか外に興味を持たなかった頃よりも、物事を考える時間が増えた様に思える。地下にいた頃の方が時間が沢山あった筈なのに。

自分らしく無いような考えをしている事に気付いたフランドールは少し驚いたが、どうにも面白くなってしまう少しばかり頬が緩む。

今は考えるのはよそうと、フランドールは顔を上げてもう一度弾幕の嵐を見始めた。

蓬萊の呪い

辺り一面に広がる焼け焦げた匂い。

未だ燃え盛る竹林を消火する為に、兎達が忙しく走り回っている。

フランドールは、此方に降りかかって来る火の粉を振り払いながらその様子を眺め続けていた。

「随分派手にやったねえ」

1人眩きながらフランドールは、妹紅と輝夜の殺し合いなるものによつて引き起こされた、この状況への回想を始める。

2人による殺し合いは、始めの内はお互い周りに被害が及ばない様に気を遣っている様であったが、時間が経つて白熱してくると、その事を忘れてしまった様でお互いに一切手加減の無い攻撃をする様になった。

永遠亭に飛んでくるようなものは流石に無かったが、2人の流れ弾は次々と周辺の竹林を破壊していく。

そんな中、妹紅が放った炎が1つの竹に引火し、どんどんと火の手を広げていった。それに気付いた兎達が2人を止め、現在の様に火を止めようと駆け回っているのだ。

暫くの間惚けながらその様子を見ていたフランドールであったが、どうやら兎達の懸命な消化活動が功を奏した様で、竹林に広がっていた火の手は完全に消し止められた。

「あー久しぶりだからか竹林に引火しない様にするの忘れちゃったよ」

「……正直あんたと殺り合うよりこっちの方が疲れるわ」

お互いに愚痴を零し合いながら2人の少女がこの屋敷へと戻って来ている。

どちらの髪も乱れ、衣服は一部が焦げたり破れてたりしている。

2人は、フランドールが座っている縁側まで来て腰を落とす。

少しの間沈黙が続いたが、妹紅がふとフランドールへ顔を向けた。

「ずっと見てたみたいだったけど、そんなに面白いもんだったか？」

「勿論。他人の弾幕を見ることや貴方達が慌てふためく様子も、何もかもが私にとって

は新鮮だしね」

そんなもんなのかと思ひながら、妹紅は、なんとなくその場で寝転んで空を見上げる。

「そういえば、ちょっと前こうやって火事騒ぎになった時に、取材とか言つて天狗が来なかつたけ？」

「あーあの新聞記者とか言うやつか」

輝夜と妹紅が言うには、前にも同じ様に竹林に燃え移ってしまった事があり、その時

に烏天狗の記者が取材をしに来たとの事である。

フランドールは、いつのことだったか自分にも同じ様に取材と言う体で屋敷に入つて来た天狗が居た事を思い出した。

「私にも来たことあるわ、その天狗。隕石を壊した時だったかしら」

「へえ、貴方の所にも」

色々な所に行つてゐるのねえとその天狗に感心した様に答える輝夜。

すると、空を見上げていた妹紅が、突然何かに気付いた様で声を上げる。

「噂をすればつてやつか。こつちに飛んできてゐるあの天狗じゃないか？」

妹紅に言われ、2人は空を見上げてみると確かに誰が此方に飛んで来ている。

風切音と共に高速で急降下して来たその人物は、3人の目の前で地に降り立った。

「どうも、先程の火事について取材に来ました」

「やっぱり来たか、この天狗め」

「射命丸文です。それで、前にもこんな様な事が有つたと思うんですけど、今回もまた煙草のポイ捨てとか言うんですか？」

「根に持つなあ。今回もそんな様なもんだよ、諦めて帰りな」

妹紅と射命丸文と名乗つた天狗が押し問答を続けていると、ふと文が2人の方を見る。

「あれ？ レミリアさんの妹さんじゃないですか。どうしてこんな所に？」

文は、フランドールの姿を見つけると妹紅との押し問答を止めて、2人の方へと近づいてくる。

文は当然の疑問をフランドールに投げかけた。

文からすると、フランドールは情緒不安定で外出を許されていない、と聞かされていた。しかし、どうした事か屋敷の外に出ており、一体何の繋がりか永遠亭で輝夜とお茶を飲んでいるのだ。

「どうしてって、お茶飲んでたいから此処に居るのよ」

「そうじゃなくて……、貴方は外に出る事を止められていたのではなかったのでは？」

「出会う奴皆んな同じ様な事を聞くのね。そんなに私が外に出るのが気になるのかしら」

「普段外に出ていない人が出てきたらそれだけで気になるとは思いますけどねえ。まあ私の場合は新聞のネタになりそうってのもあるんですが」

フランドールは、暫くの間、面倒である為に文の取材を断り続けていたが、しつこく食い下がってくるので答えることにした。

「しつこいねえ。それで、何で外に出れたかつて？ 別に閉じ込められてる訳じゃない

んだから出ようとすれば出れるわ。外に出たのは、まあずっと家の中で休んでたし

ねえ。外の景色が見たくなっただけよ」

「はあ……、それでレミリアさんは許してくれたんですか？」

「そうねー」

フランドールに対していつもの調子が取れない様子の文であったが、良いネタだと感じたのか、フランドールが言ったことに、戸惑いながらもこまめにメモを取っていた。

文が、フランドールが永遠亭に居る理由を聞こうとすると、輝夜もそこに割って入ってきた。

「それは私も聞きたいわね。うちのイナバが連れて来たって言うてたけど、どうして永遠亭にいるかはまだ聞いてないもの」

フランドールは、そういえばまだ話していなかったなと輝夜への説明も兼ねて永遠亭に來た経緯を話し始めた。

「えーっと、まあ要するに不老不死を見に行こうと博麗神社からこつちまで向かつてる内に竹林で迷ってしまい、そこで妹紅さんと鈴仙さんと出会ってここまで連れてきてもらったと」

「大体合ってる」

従者の兎からお茶の御代わりを貰ったフランドールは、輝夜と文に今までの経緯を話

し終えていた。

「イナバが永琳にお仕置きされてたのもそういうことだったのねえ」

フランドールは、何処か納得した気の輝夜に相槌を打ちながら貰ったお茶を飲み終える。

博麗神社の時もそうであつたが、緑茶が意外にも好みな様で、帰ったら咲夜に入れてもらおうと思う程気に入っていた。

流石に結構な量を飲んでいたので御代わりを貰うのは止め、口内に残る緑茶の余韻に浸りながら縁側で惚けることにした。

すると、輝夜がフランドールに向かって話しかけてきた。

「不老不死を見にここまで来るってねえ。幻想郷は変人だらけだけど、貴方も相当変わってるわね」

フランドールは、よく言われるわと微笑みながら答える。

そういえば輝夜も不老不死と呼ばれる存在であつたなという様な事をぼんやりと考えていると、ある疑問が湧き始めた。

不老不死の存在そのものについて。

妹紅の復活の場面を見たときはかなりの衝撃を受けた為に冷静に考える事が出来なかつたが、よくよく考えてみると、まだ不老不死とは何たるかを完全に理解出来ていな

い。

先天的なものか、あるいは後天的なものなのか。後天的なものだとしたら如何様にしてか。そして、不老不死は果たして文字通りの不老不死であるのか。

際限なく、次々と浮かび上がってくる疑問に答えを出そうと、あれこれと思考を巡らせるが、依然解を得ることは出来ない。

一人思考の海へと漂うフランドールを我に返したのは輝夜の声であった。

「どうしたの？ 急に何か考え始めちゃって」

そう声を掛けてきた輝夜の顔は、少し困惑している様子であった。

声を掛けたきた輝夜の顔を見て、フランドールはふと輝夜に聞けば良いという事に気付く。

考え過ぎる余り、簡単な事を見逃してしまっていた事に少々恥を感じながらもフランドールは輝夜にこの疑問を投げかける。

「ねえ、不老不死ってどうやってなったの？」

突然の質問に少し驚く輝夜であったが、すぐに穏やかな表情を取り戻し、フランドールの質問に答え始める

「無いとは思うけれど、なりたいの？」

「まさか。ただ知りたいだけよ。私は吸血鬼で十分なもの」

輝夜の問いに微笑みながら否定するフランドールを見て、輝夜も笑顔で返す。

「それで、不老不死にどうやってなったかよね。結論から言うと、薬を飲んだの。不死の薬、蓬萊の薬を。私がまだ月に住んでいた頃、永琳と一緒にその薬を作り上げた。そうして蓬萊の薬を飲み、蓬萊人となった私は地上に墮とされた。その時の話が、あの竹取物語って訊ね」

「月では蓬萊人になるのは禁忌って事なのね」

フランドールはそこで、どうして蓬萊人となるのは禁忌なのかを疑問に思う。

ただ、そんなフランドールの疑問を汲み取ったかのように輝夜は説明を続けた。

「月人は生と死という穢れを嫌った。そして蓬萊の薬を飲んだ者はその身に穢れを纏う事となるの。故に、私は罰として穢れに満ち溢れた地上へ墮とされた」

これが私が不老不死になった理由よと輝夜は説明を終えた。

フランドールは先程の輝夜の説明に納得した様で、もう一つの疑問を持ち出す。

「じゃあもう一つ聞きたいのだけね」

輝夜は、断る理由が無いといった表情でフランドールの頼みを受け入れる。

「不老不死って言っても本当に何をしてでも死なないの？ さつき妹紅を壊してみたけど、少ししたら元通りになったわ。でも、それだけじゃ完全な不老不死の証明にはならない。ただ、その蓬萊の薬とやらを作った貴方には、それが証明出来るんじゃない？」

輝夜は、フランドールの言葉の一部が理解出来なかったが、何ということもなく、彼女の質問に答え始めた。

「妹紅を壊したつてのはよく分からないのだけれど……。ええ、蓬萊の薬を飲んだ者に死という概念は無くなる。怪我でも、毒でも、飢えでだつて、私達を殺す事は出来ない。厳密に言うると、肉体的な死を迎えても、暫くすれば正常な身体に戻るの。だから何をしようとして私達は死なないの」

輝夜の説明を聞いて納得したのか、フランドールは何処か満足気な表情となった。ただ、ふと何かに気付いたかの様にしてフランドールは輝夜に目を向ける。

「つまり、貴方達は生きてもいないし、死んでもいない。そのどちらの性質も持ち合わせない、中途半端にすらも成り得ない存在なのね」

輝夜は、フランドールの言葉にほんの少しだけ揺れるが、何も言わず、ただ頷いた。生きる事とは、死にゆく事と同義である。

死にゆくという概念が無くなれば、それは同時に生きるという概念が無くなるに等しい。

本来は死ぬ事の無い妖精であつても、象徴とする自然が滅べば同時にその妖精も死ぬ。死神を追い返す事で寿命を持たない天人であつても、それは寿命を持たないだけであつて、死なないという事は無い。

この様に、全ての生きとし生けるものは死という概念から逃れる事はできない。

しかし、蓬莱人はこの死という概念から完全に逃れ、絶対に死なないという存在となった。同時に生という概念を失いながらも。

「貴方は、私が思っていたよりもずっと聡明な様ね」

輝夜は、フランドールに微笑みかけながら彼女を褒め始めた。

「お褒めに頂き光栄ですわ、お姫様」

フランドールも同様にして、輝夜に微笑みかける。

2人がお互いに笑い合っていると、今の今まで完全に蚊帳の外であった文が割り込んできた。

「あのー、お二人の空気を邪魔する様で申し訳ないのですが……」

「ん？ どうかしたの？」

「先程妹さんが仰っていた、妹紅さんを壊したってまさか隕石を壊した時の”あれ”をやったんですか……?」

「ああ、そういえばそれ私も気になってたわ。それで、”あれ”って何の事?」

輝夜の方は分かかっていない様であったが、文が言っているのは、隕石を壊した時に使ったフランドールの能力であろう。

文は、隕石をいとも容易く破壊した力を、死なないにしても人体に向けて使ったというフランドールに対し、興味や恐怖等が混ざった複雑な感情を向けている。

フランドールはそんな文の様子を気にも留めず、ちらりと縁側で寝転んでいる妹紅を見た。

「ああ、きゅつとしてドカーンね。ちょうど妹紅もそこで寝てるみたいだし、一回見せてあげようか？」

「えっ、ちよつとそれは……」

文の静止も虚しく、フランドールは右手を握り締めた。

突如として、辺りが鈍い爆発音に包まれる。

妹紅の肉体は、原型を留めない程に細かくバラバラになり、全方位へと散ってゆく。

一連の様子を見た輝夜は、驚いた表情を戻せないままフランドールに目を向けていた。

「壊すってこういう事だったのね……。人がこんな死に方するなんて、長い事生きてきたけど初めてみたわ」

「妹さんの力はあらゆる物を破壊出来るそうなんです。私も実際に見た訳では無かったので、何とも言えなかったんですが、こんなあつさり出来るものだとは……」

2人が妹紅の爆発ぶりに驚きを隠せないと、先程まで妹紅が寝転んでいた場所

に段々と肉体が形成されていった。

肉体の形成が終わった妹紅は、怒った様子でフランドールを睨み付けている。

「フランドール、お前また私を殺したのか？」

「あら、今回は随分復活が速いのね」

「全く、一体私がお前に何したってんだ」

「百聞は一見に如かずって言うじゃない？」

意味が分からんと愚痴を零しながら、妹紅はフランドールに詰め寄っていく。

そこで文が、妹紅にこうなる前までの経緯を説明した事で妹紅は、渋々ながらも納得した様で、不機嫌であるものの縁側に座り直し、落ち着いた様であった。

「そういえば、フランドールさん、貴方は外を見て回っていると仰ってましたが、次は何処に行かれるか決まっていますか？」

突然の文の問い掛けによって、フランドールは次の目的地がまだ決まっていない事に気付いた。

「決まっていないわねえ。まあ元はと言えば何の目的も無かったし。いくつか候補は考えているけど、焦って決めるものでもないからね」

「そうですか。出来れば妖怪の山には来て欲しく無いんで立ち寄らないで下さいね。まあ神社とかは別ですが」

どうやら文がフランドールに目的地を聞いてきたのは、妖怪の山に向かうかどうかを確かめる為であった。

フランドールが、未だ目的地は決まっていけないと答えた為に、文は、フランドールが妖怪の山に来る可能性を認めないと判断し、かなり直接的だったが、山への侵入を拒絶する事にしたのだ。

ただ、来てはいけなと言われると誰しもが行きたくなるものである。また、霊夢の話で聞いた守矢神社の存在も気になっていたのもあり、フランドールは次の目的地を妖怪の山へと決める事にした。

「それでは、私はこの後記事を書かなければいけないので、この辺で失礼します！」
そう言つて文は飛び上がり、すぐさま目では見えなくなつてしまった。

暫く文の姿を見送つていた輝夜であったが、フランドールの方へと目を向けて、次は何処に行くつもりなのかと尋ね始めた。

「妖怪の山は行くなつて、さっきの天狗が言つてたけれど、貴方はどうするの？」

「勿論、妖怪の山に向かうわ」

吸血鬼の初登山

気がつくと、星々の煌めきに飾られた黒い空は儂げな蒼色と移り変わっていた。時が経つのは早いもので、文が飛び去ってから既に数時間は経とうしていた。

「あ、もう夜明けね。そろそろ失礼しようかしら」

フランドールは隣に置いてあった傘を持って立ち上がる。

夜明けに外へと出る吸血鬼とはなんとも滑稽なものだと思った輝夜は、微笑みながらフランドールに問いかける。

「あら、吸血鬼というのは夜に活動するものではなくて？ 良ければまだ此処に居てもいいのよ。私もまだ貴方とお話したいのだから」

「お姫様からのお誘いはとても光栄なのだけれど、遠慮しておくわ」

「そう、残念ね」

輝夜は断られた事に少し気を落としたようだが、それでも直ぐに穏やかな表情に戻った。

それにしても、輝夜は空を見渡し始めた。

「寝ないで夜明けを迎えるなんて一体いつぶりかしら」

「不老不死でも睡眠は取るのね」

「ふふつ、いくら死なないって言ってもお腹は空くし眠くもなるのよ」

「へえ、そういうもんなのね」

未だ空を見続ける輝夜に釣られたのか、フランドールもまた段々と明るくなつていく空へと目を向けた。

「ねえ、貴方は吸血鬼なのにどうして明るい時に出ようとするの?」

いつの間にかフランドールの方へ顔を向けていた輝夜が、フランドールに対して問いを投げかけてきた。

フランドールは離れていく夜を目で追いながら、そうねえと一言置いてから話始める。

「私はねえ、起きているこの世界が見たいのよ。だって夜は殆どの生き物が眠っているでしょう? まあ、妖怪とか例外もいるけど。みんな寝静まつてるんだもの、退屈したらありやしないわ」

「それもそうね。異変や宴会でもない限り、あの紅白巫女や白黒魔法使いだって寝てる筈だもの」

そうしてお互いに笑い合う2人に対して、何処からか声が掛かる。

「おい、もう行くんだろ」

声がした方へと顔を見やると、既に準備を整えてフランドールも待っている妹紅の姿があった。

「どうせお前一人じゃ此処から出られないんだ。私が案内してやるから早く行くぞ」

「あら、今までずっと待っていてくれたって訳？ 随分優しいのね」

「煩いよ。置いてくぞ」

フランドールは輝夜のもとを離れ、先に歩き出した妹紅の方へと向かう。

妹紅のもとへと向かう途中でフランドールは、背後から誰かが自分の名前を呼ぶ声を聞いた。一度立ち止まって振り返ると、此方に向かって微笑む輝夜の姿が見える。

「またいらつしやい。歓迎するから」

「ええ、また遊びに来るわ」

お互いに別れの挨拶を済ませると、フランドールはもう一度歩みを始めた。

眼前に広がるのは土と樹々で構成された巨大な壁であった。

「……驚いた、山ってこんなに大きかったのね」

意図せず言葉が漏れ出て来る。

フランドールは、妖怪の山と呼ばれるものの想定外の大きさに、その場に茫然と立ち尽くすばかりであった。

永遠亭を出て妹紅と共に竹林を出た後、2人は其々の目的へと別れた。

妹紅の方は家へと戻り、自警団の仕事をしにいくようであり、フランドールの方は霊夢から貰った地図を確認しながら、妖怪の山へと歩みを進めた。

途中、妖怪の山へ向かっていると宙に吊るされて移動している奇妙なものを見つけた。どうやらそれも妖怪の山へ向かっているようだったので、付いていくといつの前か山の麓へと着いていたのだった。

「さて、着いたは良いけど何処に行こうかしら」

妖怪の山に着いたは良いが、何分広すぎる為に初めに何処へ向かえばいいのか迷い出す。

まあここで立ち尽くしている訳にはいかないと、フランドールは妖怪の山の中へと入って行った。

山の中に一步足を踏み入れた瞬間、視線が全身を突き刺すのを感じた。

フランドールは足を止めて、周辺を見渡すが人影どころか気配すら感じられない。

此方からは姿を捉えられないのに、何処からかの視線を感じ続けるといふ違和感、気持ち悪さと言ったものを抱きながら、フランドールは止まっていた足を動かし始める。

しかし、山の奥へと進めば進むほど、纏わり付く視線は強くなつていく。そればかりか自分に対する敵意の様なものが段々と昂まっていくのを感じた。

「止まれ。これ以上進むことは許されない」

頭上からフランドールを制止しようとする警告が聞こえた。

フランドールは足を止めて頭上に意識を向ける。一瞬で視線の正体はこの人物であると確信した。

すると、フランドールの前に一つの影が降り立つ。

どうやら天狗の様であった。

刀と盾を其々の手に持つその白髪の天狗は、直ぐにでも斬り伏せんとする程の鋭い眼光をフランドールに向けている。

「一体何をしに来た」

「別に来たかったから来ただけよ」

「とぼけるんじゃない。そんな曖昧な理由でこの山に侵入する者がいるものか」

「ほんとなんだけどねえ」

白髪の天狗の表情は依然として険しいままであり、到底話を信じて貰えそうにない。

それどころか、フランドールに向ける敵意は更に強くなり始めていた。

だが、この妖怪の山について殆ど知識を持たないフランドールは当然ながら、山に入っただけでこうも警戒される理由が分からずにいる。

「ねえ、どうしてこの山に入ってはいけないのかしら？」

「ここは我々の領域だからだ。そんな事も知らないのか？」

白髪为天狗の問いにフランドールが頷くと、天狗の警戒がほんの少し緩む。

無知故に侵入してきたのであれば、事情を知る事で直ぐに出て行くと考えたのだらう。

唐突に、何かを思い出したかの様にしてフランドールがある方向へ顔を向けた。

「そういえば、あそこに行きたいんだったわ」

白髪为天狗はフランドールの指す方向へと目を向ける。其処には最近完成し、未だ見慣れることのない守矢神社への索道の姿があった。

「ああ、あの神社の架空索道か」

「へえ、あれは架空索道って言うのね」

「あれを近くで見たいのだったら一度山を降りるんだな。此処から進むとどう行っても我々の領域を侵すことになる」

そう言って、白髪为天狗はフランドールに索道への行き方を教え始める。

一度此処まで登ってきたものをまた登り直すというのは中々億劫であると感じたが、この天狗の指示に従わない場合はもつと面倒な事になると考え、フランドールは素直に話を聞くことにした。

索道への行き方とついでに守矢神社の詳しい場所を知ったフランドールは、其の2つの目的地へと向かう為に山を下っていた。

「そろそろ日傘差すのも面倒になってきたわねえ。日傘のせいで色々と突っ掛かるし……」

妖怪の山はそれこそ至る所に樹々が生い茂っているが、魔法の森とは違い、所々で日の光が漏れ出してくる。

傘を刺していないとそれらに当たってしまふ為に、傘を下ろす事は出来なかった。

もういつその事、あの宵闇の妖怪の様に自分の周りを霧で覆ってみようかなんて考え始めた頃、何処かで聞いた事のある様な風切音が聞こえる。

「あやや、やっぱり来ちゃったんですねー」

フランドールの眼前に降り立ったのは先程永遠亭で出会った、射命丸文であった。

「来ないでって言われたら行きたくなくなっちゃうもんですよ」

「それは私も概ね同意しますけどね」

フランドールの言葉に苦笑いをしながら答える文であったが、唐突に纏う雰囲気を変えらる。

「さて、一体どんな用件でこの山に入ったの？」

文は普段とは違う、鋭い口調でフランドールに問い掛ける。先程の白髪为天狗と同じ敵意も向けながら、フランドールを見つめた。

フランドールはそんな文の氣迫に押されることなく、涼しげな顔をしながら先程あった事を答え始めた。

「それさつき会った天狗にも言われたわー。だからこうして大人しく山を下りてあげてるのに」

フランドールの言葉を受け、文は向けていた敵意を収める。

先程の言葉の意味が良く理解出来ない様で、再びフランドールに問い掛けた。

「どういふこと？」

「だから、さつき会った天狗がああ架空索道への行き方を教えてくれたから、素直に山を下りてあげてるってことよ」

「ああ、そういえばあそこら辺は樫が仕事してたっけ。要するに、貴方は樫と会って山を下りるように言われたってことね」

「そうね、大体合ってるよ」

フランドールがこれ以上山に侵入する気が無いという事が分かり、文は警戒を解く。しかし、それとは別にフランドールが言っていた架空索道という言葉が気になり出した。

あの索道へ向かうと言うことは守矢神社に向かうつもりなのだろうかと考え、文はフランドールへと尋ねる。

「ん？ ああそうね。この山に来るくらいしか決めてなかったから、途中で見つけた索道ってやつを見に行こうと思ってね」

「じゃあ、初めから神社に行く気は無かったと」

「そういうこと。何と言っても当ての無いもんだからねえ」

フランドールの返答を聞き、文は呆れた様な溜息を吐く。

「全く……、大した理由も無くこの山に入るなんて大抵の奴はやらないんだけど。それこそあの人間達ぐらいよ」

「私の知ってる人間ならやりかねないわね」

そう言つて、文の呆れ具合を余所にフランドールは別段気にした様子もなく微笑んでいた。

さて、そろそろ行くわ、とフランドールは文の前へと歩き出す。

文が呼び止める暇もなく、彼女の姿は小さくなり続けていった。

文は、ひたすらに個を貫き通すフランドールと組織に属する事を選んだ自分を知らず知らずの内に比較していた。

淡い黄色の髪を靡かせ、1度も振り返る事無く進み続けるその姿は、何物にも代え難い自由の象徴に感じられた。

文は組織に属する事に、不満がないと言えば嘘になるが、それなりに充実した生活を送っているつもりであった。

だが、心の何処かでほんの少しだけ、誰に命令されるでもなく自由に飛び回りたいという憧れがあったのかもしれない。

文の足は自然と、歩き去っていくフランドールへと向かっていた。

「で、どうして貴方が私に付いて来てるのかしら?」

楯と呼ばれた天狗が言っていた道を進んだフランドールは、守矢神社へと続く架空索道の真下で佇んでいた。営業スマイル崩す事の無いを天狗を隣に置きながら。

「まあまあ、良いじゃないですか。新聞のネタになると思っただけですよ。密着取材って訳です」

フランドールは、いつの間にか自分に付いて来ていた文に目を向ける。

「貴方の取材ねえ。あれだけ話を通じないとか言つてたくせに、分からないもんね」

「だって本当に仰つてる事が分からないんですもん」

「まあ好きにすれば良いよ。私にとっては居ようが居まいが大して気にする事でもないわ」

では、好きにさせて頂きますねと文はフランドールの写真を撮り始めた。

写真を撮る音の煩わしさに少し後悔しながらも、フランドールはもう一度上空の架空索道へと目を向ける。

乗り物の類は初めて見るフランドールだったので、少し期待をしながら何かが始まるのを待つていた。

ただ、幾ら待っても何も始まる様子は無かった。

「あー、そういえば河童達が最近不調だからメンテナンスしてるとかなんとか」

「それって動かないってこと？」

「まあそうなりますね」

「残念。ちよつと楽しみだったのだけど」

架空索道が動かないと知った事で、フランドールの顔が少し不機嫌なものになった。

初めてフランドールの不満げな表情を見る文は、その事を意外に思いながらも、フラ

ンドールを励まそうと声を掛ける。

「大丈夫ですよ。山の上の神様や河童達のことだからどうせ直ぐに直るでしょう。それに、権から神社の場所も教えてもらってたのでしよう？ ついでだから行ってみませんか？」

文の言葉を聞き、フランドールの表情が普段のものに戻る。

確かに、山の上にある神社も気になるとフランドールは文の提案に乗る事にした。

「霊夢から貰った地図を取り出し、先程教えて貰った道と照らし合わせる。」

「あれ、そんな地図持ってたんですか？」

「霊夢に貰ったのよ。もう要らないんだってさ」

「へー、あの巫女って案外優しいんですね」

「ゴミを押し付けられただけじゃない？」

「それを貴方が言うんですか……」

暫くの間、多少の雑談を交わしながら歩き続けていると、境内へと続く階段と鳥居が見えだした。

「思ったより長かったわ。少し眠くなってきたわ」

「そういえば、吸血鬼って昼間は寝てますもんね。レミリアさんの事もあるのですっかり忘れてました。夜更かしは良くないですよ」

「私達の場合は昼更かしてやつじやないの？」

「……確かに夜更かしとは呼ばないか」

階段を上り終え、鳥居を潜ると神社の本殿の前に1人の少女が箒を持って立っているのが見えた。

彼方の少女も2人の姿を見つけたらしく、此方に向かって声を上げた。

「参拜の方ですかー？ 此方へどうぞー！」

満面の笑みを浮かべながら此方に駆け寄ってくる少女の服装は、どうにも何処で見た事があるような格好であった。

神坐す山

フランドールと文の元へと駆け寄ってきた緑髪の少女は2人を見るなり、参拝客じやなさそうねと言つて肩を落とした。

彼女の服装は白と青を基調とした巫女服のようであり、どういう訳か腋の部分が空いているデザインはどこぞの紅白巫女を彷彿とさせる物であつた。

「全く、失礼な方ですね」

「そうねえ、流石に会つて早々落ち込まれるとは思ひもしなかつたわ」

喜んで出てきておいて勝手に落ち込むといった少女の失礼極まりない行動にも、2人はこれといつて怒る様子も無く、呆れるばかりであつた。

「ああ、失礼しました。そのロープウェイがつかえなくなつてから、参拝客の数がめつきり減つてしまつたものですから、つい」

緑髪の少女は、先程ロープウェイと呼んだ架空索道の不調による神社の不況を嘆いている様で、久しぶりの来客である2人を参拝客だと勘違いしてしまつたのだという事であつた。

文が言うには、少女は東風谷早苗という名であり、この神社の風祝と呼ばれる巫女の

様な物であるそうだ。

早苗と呼ばれる少女は、近年、この神社の二柱である神と共に、幻想郷に信仰を集めに来たそうだ。

「そういえば、其方の方はどなたですか？」

早苗は文に顔を向けて、フランドールについて尋ねてきた。

「レミリアさんの妹さんなんですよ。フランドールさんです」

「フランドールよ。東風谷早苗さん」

早苗は、フランドールがレミリアの妹であると聞いて驚いた様でフランドールの事をまじまじと見つめ始めた。

「へー、レミリアさんって妹さんが居たんですねえ。確かに、形は全然似てないけど大きい羽があるしなあ」

暫くの間フランドールを見つめ続けていた早苗であったが、満足したのか文へと視線を戻した。

そして、唐突に2人に向かって話を切り出してきた。

「さて、参拝以外でうちに来るといふ事はどんな要件があるんですか？」

早苗が言うには、参拝以外の目的でくるのは営業関連の話が殆どである為に、今回も吸血鬼がいる事は無しにして、天狗である文が来たことからその話であると踏んだ様で

あつた。

ここまで早苗と文の話を聞いていたフランドールが早苗に向かつて口を開いた。

「此処に来たのに理由なんてないわ。強いて言うならついでもの」

「まあそうですね。私はフランドールさんの密着取材をしてる訳ですから自然と付いて来ただけですの」

2人の言葉を聞いた早苗は、ついだという意味がよく分からなかった様で2人に向かつて今までの経緯を話す事を要求してきた。

「んー、何処から話せばいいんですかね」

「全部気になりますよ！何年か幻想郷で生活してきましたけど、レミリアさんに妹さんがいる事さえ知らなかったのに、それがいきなりうちに来る事自体おかしいじゃないですか！」

「ちよつと面倒だけど全部話せばいいんじゃない？」

文はフランドールの意見に納得し、早苗に話す事を決めた。

2人の話に興味を持った早苗は、立ち話もなんだと言う事で2人を家へと招き入れた。

「じゃあ、ほんとにうちに来たのはついだったんだ」

早苗は境内でのフランドールの言葉に納得した様な表情を見せた。

フランドールも早苗の態度に満足気な表情をしている。

ここまでの経緯はフランドールに代わって殆ど文が説明をした。

文はいちいち言う事がややこしいフランドールに説明をさせまいとしており、フランドールの方も文の思考は読めている様で、文の方を見て微笑んでいた。

フランドールによる多少の補足は有ったものの、文は、フランドールが紅魔館を出て、博麗神社、永遠亭、妖怪の山を経てこの神社に至るまでの経緯を説明し終えた。

「それにしても、貴方がロープウェイって呼んだあれが壊れちゃったのはちよつと残念だったわね」

「ほんとですよ……こつちもあれが動かないとなると人里からの参拝客が激減しちゃうもんでして……。今神奈子様か河童達と様子を見に行ってる様なんですけどねえ」

「その神奈子様ってのは此処の神様？」

「そうです。二神の内のお一人である神奈子様ですね。もう一人の方は諏訪子様と言っ
「へえ、じゃあ其処に居るのがその諏訪子様っての？」

早苗の言葉を聞いたフランドールは、部屋の奥の方にある一点を見続けていた。

早苗はそんなフランドールの言動に首を傾げながらも、彼女が目を向けている方へと顔をやる。

すると、突然その場に頭に不思議な帽子を被った少女の姿が現れた。

「あれま、よく気づいたね」

「んー、何となくね」

「あれ、諏訪子様じゃないですか。いつから居たんですか？」

現れたその少女は諏訪子様と呼ばれている事からも、フランドールの予想は的中していた様だった。

「そうだねえ、まあ大体こいつらが境内に入ってきた時かな」

「それ最初からじゃないですか」

早苗の言葉に諏訪子は笑って返す。

「妖怪が境内に入ってきたからちよつと警戒して見てたんだけど、妖怪にしては随分変わった事してるみたいだし、面白そうな奴だから大丈夫かなって思ってた」

諏訪子の言葉に早苗も頷いて答えていた。

吸血鬼が昼間に出歩くのもそうであるが、幻想郷をわざわざ歩いて見て回りたいなど

といった行為はやはり誰が見ても妖怪らしくないと見えた。それこそ人間が考える様なものである。

文もフランドールの行為が風変わりである事に同意している様で、早苗と同じ様に相槌を重ねていた。

「……やっぱり眠いわ。ちよつと寝ていいかしら？」

境内の会話から眠そうに何度も欠伸をしていたフランドールであったが、とうとう限界が来た様で、やはり欠伸をしながら目蓋の重みに敗北しようとしている。

「あれ、大丈夫ですか？」

「……んーだめ……夕方位に起こして」

文の呼び掛けも虚しく、フランドールはその場に寝転んで直ぐに寢息を立て始めた。肩を軽く叩きながら再度声を掛けるが、一向に起きる気配はなく、容姿に見合ったあどけない寝顔を見せている。

「はあ……こうして寝てると可愛いんですけどね」

「どうしよう、お布団出してあげた方がいいのかしら」

「神の前で寝るなんて図々しい奴だねえ。もつと話聞きたかったのに」

三人は其々の表情をしながら、すやすやと眠るフランドールを眺め続けた。

フランドールがふと目を覚ますと、辺りを激しく叩く雨音と自分を包む柔らかな感覚に気付いた。

何となくその場から動きたくないといった欲求に抗って立ち上がり、襖を開けて部屋を出る。

周りの明るさや激しい雨音によって勘付いてはいたが、外を見るとやはり豪雨であった。

「夕立だねえ。夏の風物詩だ」

声を掛けられて後ろを振り返ると、フランドールに向けて笑みを浮かべている諏訪子が立っていた。

「夏の風物詩ねえ……お陰で私は外に出られないんだけど」

「あら、吸血鬼つて水駄目なんだっけ？」

「そうね、降るものだったら雨が一番怖いもの」

ふーんと適当な返事を返した諏訪子はくるりと後ろへ向くとどこかへと歩き始める。

「付いてきなよ、夕飯出来るみたいだしさ」

そう言つて諏訪子は前へ向き直し、再度歩み出した。

フランドールも諏訪子に付いて行く様にして歩き始めた。

初めてきた場所で所々軋む廊下を歩きながら雨音を聞いていると、どうにも不思議な気分になっていく。何となく落ち着く様な、それでいて本でも読んでいたいといった、そんな気分であった。

フランドールにとつて雨は不愉快極まりない物であり、同時にその音も鬱陶しいものであったが、今日はどうした事かそれらを感じる事は殆どと言ってなかつた。

諏訪子が部屋に入っていくのを見て、続いてフランドールもその部屋へと入っていく。

「あ、フランドールさん。おはようございます」

「あら、まだ居たの」

「そりやそうですよ。なんて言っても密着取材なんですから」

文との会話との会話もそこそこに、誰かがフランドールへと声を掛けてきた。

「貴方が早苗の言つてた吸血鬼の妹ね」

フランドールが声のした方へと顔を向けると、紺色の髪をした女性の姿を見つけた。

「ああ、貴方が早苗の言つてた神奈子様って神ね」

「そう、私は八坂神奈子。この神社に住う神様よ」

諏訪子もそうであったが、神奈子からは神と呼ばれる様な儼かな雰囲気は乏しく、ど

こか親しみすらも覚える様なものであった。それでいて、この二神の実力は高いものであると容易に感じる事ができる。

フランドールにとってそれは、少しだが姉を連想させることとなった。

「飯できましたよー」

早苗の声にその場に居る一同は、一斉に早苗の持つてくる料理に目を向ける。

5人分、しっかりと人数分用意された料理は早苗によつて次々と食卓に並べられていった。

普段3人で使っている所に2人分追加した訳なので、少々狭くはなつていたが守矢の3人は特に気にした様子もなく、笑顔で食事を迎えようとしている。

「あやや、私まで頂いちやつて良いんですか?」

「外は大雨で暫くは出れそうにないですから。それにお客さんと一緒にご飯を食べるのは随分と久しぶりなもの」

早苗の表情は綻んでおり、誰が見ても楽しそうな様子であった。

神奈子と諏訪子もそんな早苗の様子を見て、何処か嬉しげに思っている様であった。

「妖怪を招いて食事をするなんて聞いた時は、とうとう麓の神社の様になるのかとか思つたけれども、早苗の様子を見てると流石に断れなかつたわ」

「神奈子は早苗に甘いねえ。まあ私も似た様なもんだけどさ」

早苗が座り5人揃った事から、皆それぞれ食事を始める。

フランドールにとってこの料理は、靈夢の作った物と比べて味付けが濃い目に感じられた。それでも、決して不味いと思うことは無く、これはこれで美味しいと思つていた。

「靈夢とことは味付けが違つてるのね。こういうのも美味しいわ」

早苗は、靈夢さんのところでもご飯食べたんですねとフランドールに返し、さらに続ける。

「私は外の世界での味付けが染み付てますから味が濃くなりがちなんですよね。でも、お口にあつたみたいで良かったわ」

フランドールが文の方を見ると、文も早苗の作った料理に満足している様で、手を止めることなく食べ続けていた。

「そういうえば神奈子様、索道の件はどうだったんですか？」

早苗の質問に、神奈子は食事をする手を止めて答え始めた。

神奈子が架空索道の様子を河童に聞いたところ、どうやら動力部分である装置の破損が見られる様であった。

動力部分ではなく、索道自体に目を向けていた為に発見が少々遅れたとの事であったが、幸いにも破損部分は直ぐに修理出来るとのことだったので、修理後の動作確認も兼

ねて1週間程で復旧出来るとの事だった。

「良かった。やっと完成したのにもう使えなくなったらどうしようかと思いましたよ」

「私も結構焦ったよ。折角苦勞して天狗と交渉したのに、それが無駄になるかと思ったもの」

フランドールが2人の安堵している様子を見てみると、文の方も同じ様に思ってたらしく、口を開き出した。

「そうですね。天狗の立場としても索道の件はかなり渋った様ですし、この様な形であの索道が意味を成さなくなると、此方もあの交渉は時間の無駄だったと言わざるを得ませんでしたから。何にせよ通常通りに戻るなら幸いです。新聞のネタにもなりますしね」

文が天狗としての意見を率直に述べた事で、早苗と神奈子の方も満足している様だった。

両者の関係が円満に進む事になったのもあり、その後の食事は更に盛り上がったものとなった。

フランドールが、間欠泉センターや核融合についての話に興味を持ったことから、早苗が誇った顔で語り出し、文の理解が追い付かなくなっていたり、今まで起きた異変に

ついで様々な事を語ったり等々。

そうして食事を終える頃には、あれほど煩かった雨音も段々と弱まってきていた。

フランドール達が食事を終えて暫くすると、雨はすっかり止んでいた。空には相も変わらず輝き続ける星々が漂っている。

「まさか貴方があそこまで話についてきてくれるとは思いませんでしたよ。

縁側で夜空を眺めていたフランドールの背後から早苗の声が掛かる。

フランドールはゆっくりと振り返ると早苗に向けて微笑んだ。

「結構面白い話だったわ。図書館でその話についての本を探そうと思えるくらいにはね」

フランドールは、吸血鬼の弱点である核を知ることを見つめ、それどころか寧ろ理解を深めようとしていた。

早苗が理由を聞くと、フランドールはただ何となくだと答えた。

フランドールは、魔法を嗜む者にとって知りたくない知識なんて無いのよと微笑み、早苗の話を聞く事を止めはしなかった。

「そういえば、次は何処に行くか決めてるんですか？」

「いいえ、全く考えてなかった」

フランドールは、今までに同じ様なやりとりを何度かした事がある事を思い出し、こういう所は変わらないなと何処か自嘲気味な気分となった。

「じゃあ、妖怪の山を見て回るってのは？」

早苗の提案にフランドールはいくつか疑問を覚えた。

妖怪の山への侵入は天狗達によって禁止されているものであるし、他にも侵入不可の領域があると聞いた。そんな中で山を回るなどという行為は到底不可能に思われる。

フランドールはそれらを早苗に伝えると、早苗は大丈夫ですよと何処か自信あり気に答える。

「そこは私や神奈子様がなんとかします！」

「ああ、なんも考えてなかったのね」

根拠の無い自信を晒した早苗だったが、その事をフランドールに指摘されてもその自信が失われることはなかった。

するとその話を聞いていた神奈子が話に入り込んでくる。

「まあまあ、流石にこの山中は無理だけど私らの手が掛かっている場所は大丈夫よ」

「となるっ？」

「明日もう一度、河童達と動力部分に行く。付いてくる分には何も問題は無いわ」

神奈子の言葉を聞いた早苗はフランドールに向かって、ほらねと笑い掛ける。

早苗の笑みに釣られてたかの様に、フランドールはくすりと笑って再び夜空へと目を向けた。

昼夜逆転に挑んだ吸血鬼

フランドールは一人、空を眺め続けていた。

時刻は丁度日を跨いだ頃であり、先程まで共にいた4人は既に寝静まっている。

気が遠くなる様な数の星々が夜空を照らし続けている。

ずっと見続けていると、何故だか自分が夜空の中に浮かんでいるように思われて、有り得ない話ながらも、どうにもその星達に手が届きそうに思えた。

普段外に出るどころか外の景色すらも見ていない彼女からすると、やはり空を見上げるといふ行為はそれだけで彼女を新鮮な気持ちにさせるのであった。

何人かで空を見上げる事も良かったが、一人で物思いに耽りながら空を眺める事もまた違った意味で良いものだったといった事をフランドールが考えていると、背後から気配を感じた。

「眠れないんですか？」

フランドールが振り返って見ると、何処か寝惚け眼で彼女を見つめている文が立っていた。

「私は吸血鬼よ？夜に起きるなんて、寧ろ普通ですわ」

「それもそうでした。私が昼型であるものでつい」

「妖怪の癖に夜に寝るもんなのね」

「私ら天狗はそういう妖怪ですからねー」

フランドールは文の言葉に軽く相槌を打って、もう一度空へと向き直った。

何か感じる事があったのか文は、僅かに体勢を変える事はあれど空を見る事を止めようとしないうちにフランドールの隣へと座りだす。

フランドールは隣に座ってきた文をちらりと見るが、特に気にする様子もなく、また直ぐに空へと向き直った。

暫くの間沈黙が続いていたが、どの位時間が経った頃か、ふと文が口を開いた。

「フランドールさん、貴方変わりましたね」

文の言葉を受けて、フランドールは彼女の方へ目を向けた。

「そう思う?」

一瞬驚いた様な表情を見せたフランドールだったが、すぐに文に向かって微笑み始める。

「ええ、私から見た貴方はもつと危ない奴って感じでしたしね。こうやって静かに一日を楽しんでいる姿なんて想像出来ませんでしたよ」

「ふーん、貴方にはそう見えたのね」

「そりやあまあみんな同じ事思ってるんじゃないですかね」

あら、心外だわとフランドールはくすくすと笑う。

別段気にしていない様に笑うフランドールの姿はやはり、文にとつてはいつもと変わらない危なげなものに思えたが、それでも、彼女の内にある何処かで穏やかなものが育ってきているという事もまた感じられたのであった。

「やつぱり変わったと思いますけどねえ」

「私は私よ。貴方が見ていた私も、今ここに居る私も、私として何ら変わらないもの」

文の言葉を否定する様に答えたフランドールであつたが、ただと一言加えて、もう一度口を開いた。

「まあでも、確かに昔は空なんて興味もなかったからねえ。貴方の言う事も完全に違うって訳じゃないのかもね」

フランドールもそういつた自覚が無い訳では無かつた。

そもそも、外に出る事にそこまでの興味を持つていなかった筈なのに、今では外を眺めながら湧き上がる思いや感情に身を任せる事を繰り返しているのだから、これで自覚していないというのは無理が有ると言つて良かった。

「一体何が貴方を変えたのかは分かりませんが、そんなにずっと外を見ていて飽きたりしないんですか？」

「んー、別に飽きたりはしないわ。こうやって外を眺めるのは私にとつてはまだまだ新鮮な事だからね。それに、何百年も一人で暇を持て余してたくらいなんだから元々こういうのが合ってるのよ」

「そんなもんなんですよねえ」

「そんなもんよ」

そうして2人の会話が終わり、フランドールはまた夜空へと目を向けた。

文も何となくフランドールの方を眺めていたが、如何せん先程まで熟睡していた訳であり、ようやくと丑三つ時になる様な時間の為もあつてか、彼女に睡魔が襲ってくる。

これは逆らえそうにないなと大きな欠伸をしながら、彼女は立ち上がってフランドールに背を向ける。

「もうお休み?」

「ええ、もう目が開きませんから」

文は、フランドールに向かっておやすみなさいと一言告げて、部屋へと戻っていった。

フランドールはそれに返答を返す事はなかったものの、文に向かってゆつくりと右手を振るのであつた。

「あら、おはよう早苗」

早苗が朝の7時半ごろに目を覚まし、居間に向かうとフランドールと文の2人は既に目を覚ましているようであった。

「あれ、2人とも随分早いですね」

「私は記事のネタを探すのに朝から飛び回ってますから」

「私はそもそも寝てない」

フランドールの寝ていないという声に驚いた早苗であったが、彼女が吸血鬼であった事を思い出し、それが至極当然であった事に気付く。

「なんだ、やつぱりあの後も寝なかったんですね」

「そりや、夜に寝るなんて中々出来ないわ。ほんとお姉様は良く出来るよねえ」

「あの後？」

早苗が疑問を口にする、ああそうだったと文が早苗に向けて説明を始めた。

「私が夜中の1時頃に目が覚めちゃって、何となく縁側の方に行っただんですよ。そしてらフランドールさんが飽きもせずずっと空を見てたんですよ」

「飽きもせずって何さ」

「そこから2時くらいまで暫く2人で話してただんです」

「じゃあそこで文さんが寝てから今までずっと起きてたつて事なんですね」

「うん、そういうこと」

文の説明が終わり、納得した早苗は、ふとある事を思い出して立ち上がる。

朝食の準備である。

普段はこの時間帯に自分以外に起きてる者がいないので自然と朝食の準備へと入っていたが、今日に限ってはそうでは無かった為に少しの間ではあるが忘れてしまっていたのだ。

「さて、朝ごはんの準備をしなきゃ。ちよつと待つててくださいね」

早苗は2人にそう伝えると、1人台所へと向かう。

「あの神様2人は起こさなくていいの？」

「大丈夫ですよ。私が朝ごはんを作り終えたら勝手に起きてくれますから。それに、作り終えてないとお二人とも機嫌が悪くなっちゃうんです」

フランドールの疑問に答えた早苗は、お客さんが来てるのもあるし、お二人が起きてくる前に作らなきゃと1人氣合を入れて台所に立つのであった。

「^び馳走様」

「お粗末様です」

5人は朝食を食べ終え、各々の用事の為に準備を進めていた。

各々とは言っても諏訪子以外の4人は昨日の話に出ていた動力部分への視察に向かうのであるが。

一応早苗が諏訪子に対して一緒に来ないかと誘ったのだが諏訪子曰く、そういった事は神奈子のものだし、それに私自身そこまで興味がある訳でもないとの事だった。

「さて、私らは出るとするか」

神奈子の一声によってそれぞれ準備を終えていた4人は、諏訪子に留守を頼みつつ玄関へと向かった。

「で、これからどうやってその動力部分とやらに向かうつもり？」

外に出たはいいが、その場所への行き方が分からないフランドールは3人に向かって問う。

文もどうやら同じ事を思っていた様でばつの悪そうな顔をしている。

「ん、私も1回だけちらつと見た程度なので……。正直道のりを覚えてる自信が無いですわねえ」

神奈子はそんな文の様子を見て笑い出す。

「心配要らないわよ。何回もそこに通ってる私が、道を忘れる訳ないでしょう？」

「それもそうです。安心しました」

「ただ、ちよつと距離があるからね。いつもは飛んで行くんだけど、その吸血鬼は大丈夫なの？ ほら、日光とか色々」

神奈子の率直な疑問に、他の2人も頷く。

歩くだけであれば日傘で何とかかなりそうだが、空を飛んで移動するとなるとこれまた勝手が違うと思つたのだ。

「多分大丈夫だと思ふけどねえ。お姉様も出来てるんだし」

「なら良いけど」

「最悪、私の周りにだけ霧でも出しとけば大丈夫よ」

フランドールがおおよそ大丈夫そうであることを確認できた神奈子は、それじゃあ出発するかと3人に向けて言いながら飛び上がる。

3人も神奈子に続く様にして飛び上がった。

フランドールは暫くの間3人と軽く話をしていたものの、ふとこれが外に出て初めての飛行であることに気付く。

視線を下に落としてみると、下から見るとはまた違った、妖怪の山の雄大さを物語る景色が広がっていた。

フランドールは思わず息を呑み込む。

眼下に広がる緑一面の風景は、自分が知る何よりも美しく思えた。

今までは特に用も無かった事もあり、飛ぶ事はせずに歩いていたのだが、上空から見る光景も地に立って見る光景とは異なる良さがあるということをフランドールは学んだのだった。

「フランドールさん、灰になってますからちゃんと日傘を差してくださいよ」

突如として文の声が耳に入る。

フランドールは、文が言ったように自分の身体を確認してみると、左足辺りが少しずつであるが灰となつて消えかけている。

慌てて日傘を持ち直し、魔力を集中させて欠けていた左足を再生させる。

その様子を見ていた早苗が驚いた様子でフランドールを見つめていた。

「わ、凄いですね。吸血鬼の再生能力つて」

「これくらいはどうつて事ないわ。それにしても、私とした事が見惚れてこんな事にも気付かないなんて……」

文は、動揺しているフランドールを珍しいと思うと同時に可笑しくも思つてしまい、つい微笑が漏れ出す。

「なによ、そんな気持ちの悪い顔して」

「いえいえ、フランドールさんもそんなヘマをするんだなとねえ」

フランドールは何度止めるように言っても、文が嘲笑を止める事は無かったので諦めて前へと向き直った。

すると、神奈子が此方に向かって顔を向けた。

「おーい、そろそろ着くぞー」

神奈子はそう言つて、地面に向かって降り始めた。

3人も神奈子に続いて降下を始める。

4人が降り立った場所には、急な斜面によつて流れが急になっている川とこの幻想郷には不似合いに感じる機械の様なものが見えた。

「あれがその動力部分つてやつ？」

フランドールは目の前にある装置を指差して神奈子に聞いた。

「そうよ。あれが水力を用いた架空索道の動力装置」

フランドールの問いに答えた神奈子は、動力装置へと歩いて行く。

神奈子が動力装置へと近付くと、何人かの人影が姿を現した。

その中の1人が神奈子と話をし始めた。

3人も神奈子の方へと歩みを進めた。

「おや、今日は連れが多いね」

神奈子と話していた者が此方に気付き、話しかけてきた。

「どうやらフランドール以外の3人は見知った顔らしく、それぞれ軽く挨拶を交わしている。」

「んで、そつちの傘差してるのはどなた?」

「人に名前を聞くときはつてね」

「これは失礼。私は河童の河城にとりさ」

にとりと名乗った河童曰く、河童はこの動力装置のメンテナンスを担当しており、
矢神社とは取引関係であるという事であった。

「まあそういうことさ。それであんたは?」

「私はフランドール。フランドール・スカーレットよ」

「スカーレット……ああ、あそこの吸血鬼の妹か。天狗の新聞なんかで見たことある」
「それ多分私の新聞ですけど」

少しの間軽く話をしてしたが、頃合いであると本題に戻った。

神奈子が動力装置の状況について尋ねると、にとりは少し考える様な表情をして答え始める。

「そうだねえ、修理自体は今日中に終わると思うけどまた同じ様な壊れ方をしないか確認したいし……。まあ、そういう調整も込みであと3日掛かりますかね」

にとりの言葉を聞き、早苗が何か少し考え事をしてから話し始めた。

「確かに、また同じ様な壊れ方をしないとも限らないわね……。私も確認させてもらっても良いですか？」

にとりは早苗の意向を承諾すると装置の方へ向かっていった。

早苗もそれに付いて行く様にして装着へと近付いていく。

すると、早苗は途中で足を止めて3人の方へ振り返った。

「折角だから皆さんも一緒に来ませんか？」

唐突に早苗の誘いを受けたフランドールであるが、その誘いに首を振る事にした。

「生憎、私は流水を渡れないからね。そつちには行けないのよ」

神奈子と文も早苗の誘いには乗らない様であった。

「私はそつちの方面にはからつきしだからね。早苗が行けば充分だと思うよ」

「私も同じ理由ですわねえ」

3人の答えを聞いた早苗は、じゃあ行つてきますねと一言を残して前へと進んでいった。

時刻はおおよそ正午となる頃であった。

神奈子とフランドールは木陰で休んでいる最中であつた。

日が昇り、気温が上がってきたことから早苗を待つ以外特にやる事が無くなった2人

は涼しげな場所で休もうとこの木陰を見つけて今に至る訳である。

文は記事のためとか写真を撮るとかで、河童から事情を聞いたり、装置の写真を撮ったりといったことを続けている。

「それにしても暑いわね。何十年か前くらいにはもう少し涼しかったんだけど」

神奈子は気怠そうに手を扇ぎながらフランドールに話しかけた。

「夏って年が経つことに暑くなるもんなの？」

「今は地球温暖化つてのが問題になってねえ。簡単に言うとな人間が畏れと信仰を捨てて科学を盲信した結果つて訳」

「ああ、成る程ね。早苗が核をクリーンなエネルギーつて言つてた訳が分かったわ。温室効果ガスとやらを出さないことがクリーンつて言われてもイマイチ良く分からなかったけど、要はその地球温暖化を防ぐ為なんですよ」

フランドールの言葉を聞いて神奈子は驚いた表情を見せた。

「驚いた。早苗の話とは全然関係ない話だったと思うけど良くそこまで理解できるわね」

「簡単よ。今までの話を組み立てればそのガスとやらが地球温暖化とか言う奴に関わるのは明白だからねえ。過程を口にするのは面倒だけど」

話終えて、一息ついたフランドールは唐突な睡魔に襲われる。

正直に言ってここ最近はいつもより睡眠時間が足りていないのだ。

フランドールは、私には昼夜逆転はまだ早そうねといった事を思いながら大きく欠伸をする。

「お、どうした？眠いの？」

フランドールは霞んでいく意識の外に神奈子の声を聞いたような気がするが、何か反応を残す為の気力はもう彼女には残されてはいなかった。

そうして彼女は誰かに身体を持ち上げられたような感覚を感じながら意識を手放すことにしたのだった。

おんぶと天啓とそれと鬼

「はあ……爆睡ですなこれは」

視察や取材といった各々の用事を済ませた早苗と文の2人は、神奈子の肩に頭を預けるフランドールの寝顔の覗いていた。

かれこれ数分は頭を乗せられている神奈子であったが、別段悪い気はしない様で満更でも無さそうな顔をしている。

「こういうの見てるとちよつと悪戯したくなっちゃうなあ」

フランドールの寝顔に目を細めながら早苗は言う。

「あー分かりますねえ」

如何やら、悪戯心が湧いてくるのは早苗だけではなかった様で文もフランドールを見ながら悪意のある笑みを浮かべている。

一方のフランドールは2人の悪意のこもった視線を受けながらも全く起きる様子は無い。

それがまた2人を悪戯心を助長する結果となってしまう、とうとう早苗が手を出し始めた。

フランドールの頬を軽く指でつつき始める。

起きないことを確認しながらではあるが、その行為は少しずつエスカレートしていく。

頬を軽く揉んだり引つ張つたりと好き放題である。

「ん、んう……」

「あ」

暫くの間やられ放題であつたフランドールが、突如として寝言と共に身動きをしだしたので、2人は焦つて手を止める。

2人の間に緊張が走り、その後のフランドールの様子を固唾を飲んで見守る。

「……セーフ、ですかね」

起きる様子もなくまたスヤスヤと寝息を立て始めたの見て、ようやく2人は息をついた。

ただ、2人にとってはこのリスクを負う行為も一興なのである。

より一層火が付いた2人は、先程の行為をまた楽しもうと手を伸ばし始めた。

すると、見かねた神奈子が2人に落ち着く様に諭し始める。

「こら、これ以上は起きちゃうわよ。寝不足らしいんだから寝かせてやりなさい」

「はい」

2人は仕方なきさうにして、神奈子の言う通りにフランドールを弄る手を止める。

まだ物足りない気分ではあったが、これ以上やって怒られても困るのでここは素直に従う事にした。

「さてと、用事は済んだからそろそろ行こうか。ちょうどお昼ご飯の食べ時でしょう？」
そう言つて神奈子は、フランドールを起こさない様にしながらゆつくりと彼女を背負い始める。

「神奈子様、私代わりますよ」

「いいのよこれくらい。あ、でも早苗にはこの吸血鬼の日傘を持ってもらえると助かるわ。下手に力を使つて運ぼうとすると起きちやうかもしれないし」

神奈子の言葉に頷き、早苗は立ててあつた日傘を手を取つた。

おぶられているフランドールが日の光に当たらない様にして日傘を差す。

ただ、神奈子の進む速さに合わせながら傘を差すというのは思つていたよりも大変であり、早苗の動きは何処かきこちないものであつた。

自分でやってみて初めて分かつた事だが、苦を感じるでもなく主人に合わせて動く事の出来る咲夜というのは本当に完璧なのだたと早苗は感じた。

「ん、今日はもういいのかい？」

「ええ、大丈夫そうなのは分かりましたから」

装置内部からひよっこりにとりが顔を出してきた。

此方の様子を確認しに、作業の手を止めてきた様である。

「あーそれにしても、神様が吸血鬼をおぶってるなんておかしな光景だねえ……」

「まあそうなりますよね……」

文もこの光景が面白い物だと考えたのかとにかくシャツターを切っている。

「ほら、あんまりぐすぐずしないの」

「はい」

3人は河童達に別れを言うと、守矢神社への帰路に向かった。

フランドールは、自らの身体が支えられ、更に浮遊感の様なものを感じた事で意識が覚醒しだした。

「起きちゃった？」

それが自分の直ぐ近くから発せられている声であるのが分かったのは、彼女の意識が完全なものになった頃だった。

「ん……どうして私は貴方に背負われてるのかしら」

「帰る時になつても寝てたからね。こうやって運んであげてるのよ」

「意外だわ。神様なのにわざわざこんな事してくれるなんて」

「そうそう、ちゃんと感謝しなさい」

ほらもう直ぐ着くよと言つて神奈子が降下を始めた。

フランドールが下を見ると、もう既に守矢神社の姿が確認でき、次第にそれは大きくなつていく。

離れる気も起きなかつたので、フランドールはそのまま背負われる事にした。

初めに神奈子と早苗の2人が、続いて文が神社へと降り立つ。

「さ、到着」

3人共何か起こるわけでもなく無事に守矢神社へと辿り着いた訳だがしかし、ここで一つ問題が起こる。

いつまで経つてもフランドールが神奈子の背中から降りようとしなないのだ。

「……まだ降りないの?」

「意外とこの状態が楽であることに気付いてしまったわ」

如何やら、フランドールは自分の足で歩かずに他人に運んで貰う事が存外に楽を出来るという事を知ってしまったらしい。

つまり言う、神様を顎で使おうとしているのである。

「神様使つて楽しようなんて、私が言うのも何だけど随分罰当たりな奴だね」

フランドールに向かって、神奈子の呆れ声が伝えられる。

当のフランドールは全くと云つて良いほど、気にしてはいない様子だった。

これ以上は付き合つてられないと、神奈子は抱えていないフランドールの足を離し、強制的に彼女を降ろす。

「あ……折角楽だったのに」

「これ以上やらすか」

降ろされた事に少々残念そうな顔をしながらもフランドールは早苗から渡された日傘を受け取った。

「さ、用事も済んだ事だしこれからどうしようか」

受け取った日傘を差しながら、フランドールは麓の景色を見やる。

妖怪の山を回るといふ目的も済ませた事だし、最早守矢神社に留まる理由もなかった。

しかし、毎度の事ではあるが次に何処に行こうなど全く決まっていなかったのだ。

「あれ、もう行つちやうんですか？」

もうお昼時だといふのに昼食も取らずに出発の意思を見せたフランドールに対して、早苗は意外そうな顔を向けた。

そんな早苗の問いに対して、フランドールは素直に頷いてみせた。

「ええ、あんまり長居する気はないしね」

フランドールはそう言うのと早苗に向かって微笑みを向けた。

「そっかー、残念だけど気を付けて行ってくださいね」

「うん、ありがとう」

早苗に礼を言い、山を下ろうと境内の外へ歩き出した時、ふと文がこれからも付いてくるのかどうか気がなった。

「ねえ文、貴方これからも私に付いてくる気？」

突然のフランドールの言葉に、何処か不意を突かれた様な顔を見せた文であったが、少しの間考えてこう言った。

「そーですねえ、中々にネタが溜まったので戻って記事を作ろうかなと。また密着取材させて下さいね？ 凄くネタ探しが捗りますから」

「気が向いたらねえ」

何処にいてもすぐに見つけちゃいますからねと文はフランドールに向かって真っ直ぐな笑みを見せる。

実際やりかねない所がこの射命丸文という天狗なのだという事は、まだ付き合いの短いフランドールでさえも容易に理解することが出来た。

フランドールはいつその事清々しく感じてしまったので、今度会う時はタダという条件付きではあるが新聞を読んでやるといふ事を文に伝えたのだった。

そうして早苗と文と神奈子の三人に別れを言うと、フランドールは山道へと向かう階段を下り始めた。

「ねえ、もう帰っちゃうの?」

フランドールが階段を下っていると、何処からか何者かの気配を感じたので立ち止まると背後から声が聞こえた。

「ああ、さっきの神社の神様でしょう? 洩矢の方の」

フランドールは後ろを振り返る事なく、いかにも悟っているかの様な微笑みを含めながらこう言った。

「あつたりー」

明るい声を周囲に響かせながら、諏訪子はフランドールの前へと躍り出た。

ただの愉しげな雰囲気であつたとしたのなら、同年代の少女が遊んでいるだけのように見えるだろう。

しかし、諏訪子が纏っていた空気はもの恐ろしげであり、そして何処か悟った様なものを漂わせていた。

「貴方のお陰で早苗が楽しそうにしてたからねえ、お礼と言っちゃあ何だけど、一つ忠告しといてあげるよ」

諏訪子の言葉を聞いたフランドールは、その不穏な空気を読み取って、一瞬間を擧めたものの直ぐに落ち着きを取り戻してみせた。

そうしてその忠告について訊こうとすると、諏訪子は此方の思考を読んだかのようにしてフランドールの言葉が出るのを遮った。

「まあまあ、直ぐに教えてあげるから。それでその忠告つてのはねえ、貴方、誰かにずっと目をつけられてるよ」

「……目をつけられてる?」

言っている意味がよく分からなかった。

ここまで、何人かの者と会ってきたが別れた後は、文を除いて誰も付いて来ている様子は無かった。それ以外の者の気配だって恐らく無かった筈なのだ。

「分からない? でも何となく感じている筈よ。ほら、本当に小さいけれど妖気を感じるでしょ? まあ小さすぎて妖気と呼べるかも分からないけどね」

言われた通りに周囲に意識を向けると、諏訪子が言った様にやはりほんの僅かな妖気を感じる事が出来た。

そしてフランドールはある事に気付く。

この妖気、何処かで感じた覚えがあったのだ。それに数回程も。

「これって……」

「気が付いた？ とは言ってもやつぱり貴方も感じた事があつたんでしょ。ただほんとに僅かな物だし、気配とも呼べる代物でもないからねえ。今まで意識出来なかつたのも無理は無いよ」

これまでの道のりで幾度か感じたこの感覚。

近くにいるだろう弱い妖怪の物であるとはかり思い気にしてはいなかつたが、意識してみると、それはそんな物では無いという、何処か核心めいた思いが湧き上がってきた。「ねえ、この訳の分からない奴の正体って何？」

諏訪子はフランドールにぶつけられた問い掛けを受け、微笑を浮かべながら可愛らしくもわざとげに後ろに振り返ってみせた。

それがフランドールを焦らす行為であるのは容易に理解出来るものであつたが、彼女は怒ることはなく、諏訪子の口からその疑問の答えが発せられるのを待ち続けた。

「鬼だよ」

「鬼？」

フランドールは全く予想していなかつた答えが返ってきたので、呆気にとられた様な顔をしてしまった。

「鬼つて、あの角が生えてるあの?」

「そう、その中でもこいつは相当強い部類さ」

諏訪子の言葉にフランドールはやはり釈然としないものを覚えたのであった。

鬼とは日本に於ける代表的な妖怪で、自慢の力で傍若無人な行為を繰り返していたというものではなかったのか。

こんな妖気の残滓に近い物が本当に鬼だと言うのか。

そういつた思考からは諏訪子の言葉によつて抜け出すことが出来た。

「鬼とは言つても、邪なもの全般を鬼と呼ぶみたいなたらしいけどね。ただ、今私が言つてるのは貴方の想像通りの鬼だよ。今こんな状態なのはそういった能力があるみたいなんだ。なんで姿を見せないかは私にも分からないけどね」

フランドールはここまでの情報を基にして現在に於ける状況を整理する。

詰まるところ、彼女はその鬼に追われているという事なのだ。

何の為にかは分からない。

文のように取材目的であるなら、質が悪いものではあるが理解出来なくもない。

ただ、そうでないのであれば一体何が目的なのだろうか。

此処まで少しの間考えたものの、やはり答えが出ることはなかった。

「まあ、理由はあんまり興味無いわ。大事なのは私が追われてるっていう事実だしね」

「お、嫌いじゃないよ、そうやってさっぱりしてるの。さて、これで私からのお告げは以上。そろそろお昼ご飯が出来るだろうし、私はもう行くわ」

「ええ、折角の託神なんだから有効的に使わせてもらおうわ」

「そうして貰えると嬉しいよ。あ、たまには遊びに来なよ？ 早苗も喜ぶしさ」

そして、じゃあねの一言と共に諏訪子はフランドールの前から去っていった。

フランドールが山を下る頃には、あれだけ高くにあつた太陽もかなり落ち、完全に沈むまであと四時間程であつた。

吸血鬼の体力は人間とは比べ物にならないほどであり、例え一日中歩いたとしても一切疲れを感じる事は無い。

ただ、歩く速度は人間のそれと一緒である。

いくら吸血鬼であるフランドールでも飛ぶ事をしなかったのならこれ程時間がかかってしまうのも無理は無かつた。

「やつと来たかい、待ちくたびれたよ」

山を出て直ぐの場所に、少女が立っているのが見えた。

先程、フランドールに話しかけてきた声は恐らく彼女の物だろう。

「貴方が鬼つてやつ？」

「あれま、バレてたか。そうさ、私は伊吹萃香。あんたの言う鬼つてやつだよ」

萃香と名乗った少女が今までに感じていた妖気の正体であるのは、如何やら間違いない様であつた。

その証拠は彼女の持つ妖気の強大さが物語っている。

これ程までの力をあの僅かなものにまで隠せていたのは並大抵の者では無い。

フランドールは、眼前に佇む自分と同じ程の背丈の少女を見てそう感じた。

「それで、私の事をずっと見てたみたいだけどどうしてなのかしら？」

「ん、そりゃあ普段外に出てこない奴がこうも外を出歩く様になつたら興味が湧くでしょ」

「そんなもんなのかしら」

「そうそう。ま、あの吸血鬼の妹つてのもあつたからかなあ。あいつ、思ったよりやるから楽しかったしね」

「お姉様の事？」

「そうさ、あいつとやり合つた時は中々楽しめたよ。そんでもって妹の方はどうなのかつてなつた訳」

萃香の言葉を聞いて、フランドールはいつかレミリアから聞かされた話を思い出した。

一時期、かなりの頻度で宴会が開かれていた時期があったのだそうだ。

後にそれは異変であった事が分かるのだが、その主犯が鬼であったのだという。

その時にレミリアも主犯と対峙したというのだから恐らくこの萃香という鬼がその主犯なのだろうという事まで理解する事が出来た。

「ああ、貴方っていつかの異変の時の主犯？」

「おや、其処まで分かつてるのか」

「お姉様から話に聞いた事があつたからね」

「いいねえ、物分かりがいい奴は嫌いじゃない。ちよつと付き合つてもらおうか」

フランドールは、唐突な萃香の誘いに意図を掴むことが出来ず、少々困惑した表情になった。

「付き合うって何によ？」

「鬼の用事なんて決まつてる。喧嘩か酒さ」

「……それで、私に求めるのはどっちかしら」

「何言つてんだよ、両方さ！」

面倒な妖怪に絡まれてしまった。

フランドールは目の前で不敵な笑みを浮かべる萃香を見ながら、そんな事を思った。しかし、内側から滾ってくる様な、そんな高揚が自らを包むのに彼女が気付く事はなかった。

拳は最良の言語なり

先程まであれだけ猛威を振るっていた太陽は雲の裏に隠れて鳴りを潜めている。

随分都合良く曇ったものだとは半ば感心しながらフランドールはこれから始まるであろう物に想いを巡らせていた。

突如としてフランドールの目の前に立つ萃香から、小さな少女の姿からは想像も出来ない程の圧倒的な雰囲気が発せられる。

今までに感じた事の無い圧力。

それは、自らの姉であるレミリアのそれよりも明らかに上回っていると感じられた。

「さあ！ おっ始めようか！」

その一声と共に大地の割れる音が響く。

気が付くと、フランドールの鼻先に萃香の頭突きが迫ってきていた。

フランドールは咄嗟に身体を仰け反らせ、萃香の頭突きを既の所で躲す。

未だ何が起こったのか把握出来ずにいる頭を可能な限り回転させながら、フランドールは後ろに飛び立って萃香との距離を取った。

「おやおや、随分動きがぎこちないじゃないの」

フランドールとは違い、萃香の方はかなり余裕が有るのだろう。

彼女は自らが持つ瓢箪に口をつけ、恐らく酒であろう液体を呑んでいる。

「生憎だけど、弾幕勝負くらいしかやらないものだからこういうのは初めてなの。貴方みたいなのとやるのは尚更だしね」

フランドールは弾幕を用いた勝負は幾度か経験が有ったものの、殴り合いをも用いる勝負は殆ど経験した事が無かった。

加えて、単純な力で姉を超える者と邂逅するのも初めての事であった。

「なんだ、あんたの姉さんぐらいの期待をしちゃったのは私の間違いだったかな」

「あら、お姉様基準で判断しないでほしいわ」

ここまでのやり取りで、フランドールはすっかり冷静さを取り戻していた。

しかし、冷静さとは相反する筈の高揚感も、同時に彼女の内側で止め処なく溢れ続けている。

湧き上がる熱が次第に身体を支配していくのを感じながら、彼女はいつかの人間との弾幕勝負を思い出していた。

あの時も同じ気持ちだったなど何処か懐かしく思いながら、フランドールは目の前にいる萃香に目を向けた。

「Cool head and warm heart. 心は熱く、頭は冷静につて

感じね」

「なに独り言言ってるのさー！」

痺れを切らしたのか、萃香は自らの頭上に、あらゆる物を焼き尽くさんとする業火を想起させる様な光球を創り出した。

「ほらっー！」

そうして作り上げた巨大な光球を、萃香はフランドールに向けて放り投げた。

常人では反応出来ない様な速度である。

弾幕勝負の様な密度は無いものの、避けさせる気は全くない代物であるのは間違いない。かっつた。

ただ、吸血鬼であるフランドールにとってはそれに限った事ではない。

フランドールは向かって来る光球の目を右手に移動させ、自らと接触する寸前でその目を握り潰した。

突如として、耳を塞ぎたくなる様な轟音と共に爆発が起こる。

萃香は巻き上がる砂埃を凝視しながら、先程の爆発を不審に思っていた。

「おかしいな……今当たる前に爆発した様に見えたけど。何かした様にも見えなかったし」

未だ晴れぬ砂埃の中を眺めていると、何の前触れも無く広範囲にわたる弾幕が飛び出

し、萃香へと襲い始めた。

萃香にとつて不意を突かれた事態であったが、それでも冷静さを失う事は無く、その場で構えをとり、当たりそうな物のみに絞って弾幕を弾き返し始めた。

放出される弾幕が終わり、辺りに広がっていた砂埃も晴れ始める。

その中から、次第に一つの影が明確な姿を持って現れ始めた。

「一つ聞きたいんだけど、あんたさっき何したのさ」

「ふふっ、内緒」

そりや教えるわけないかと萃香は苦笑を浮かべながら、フランドールに注意を向けた。

先程のやり取りから見てフランドールが何か隠し球を持っているのは間違いないだろうし、何より百戦錬磨の勘が言うのか、その奥の手に限っては警戒すべきだと感じたのだ。

「久しぶりに緊張してきちゃったなあ」

不確定要素が多く明確な答えは出ないものの、自分が倒されるかもしれない可能性が出て来た事に、萃香は少しばかりの高揚を覚えていた。

「どうやら思ったより出来るみたいだね。こりや楽しくなりそうだ」

「そつちこそ、ちゃんと楽しませてね？」

二人は同時に不敵な笑みを浮かべた後、地を蹴り出してお互いへと飛び出す。先に手を出したのは萃香であった。

飛び出した勢いのままフランドールと衝突する寸前で、更に大地を踏みしめる。

加速された勢いと共にフランドールに向かって拳を振り下ろした。

余りにも近い距離である為に、フランドールは避け切れないと悟ったのか咄嗟に左腕で受け止める。

それが予想よりも遥かに重い一撃であったのは、自身に響く衝撃と共に理解する事が出来た。

フランドールは堪え切れず、自らが持っていた勢いも完全に封殺され、後方へと弾き飛ばされる。

足が地に着かないながらも、空を飛ぶ要領で体勢を立て直し、そのまま空中で静止した。

萃香の方はフランドールを吹き飛ばした後、既に追撃の準備に入っており、此方に向かって駆け出していた。

フランドールは直様萃香の背後へと回り込むと、振り向く萃香目掛けて拳を突き出した。

萃香はまるで読んでいたかのようにして彼女の拳を捕まえると、もう片方の手で大振り

の一撃を放った。

フランドールは対応し切れず、先程の一撃が完全に決まってしまう、膝から崩れ落ちる。

地面に倒れ伏しそうなのを既の所で堪えると、萃香を囲む様にして動き始める。

萃香は足を止め、自らを翻弄せんとするフランドールの動きに意識を集中した。

足を止めた萃香をさも格好の獲物かの様に、フランドールは四方から連撃を始める。

だが、萃香はそれらを苦を感じる様子も見せずに捌いていく。

背後からの攻撃は上体を屈める事で躲し、正面や左右からのものはいとも簡単に受け止めて見せた。

埒が明かないと感じたフランドールは攻撃の手を休め、萃香の頭上へと飛び上がる。

禁忌「レーヴァテイン」

飛び上がった先で彼女は一瞬にして炎熱を纏う大剣を創ってみせた。

そうして創り上げた大剣と共にフランドールは萃香へと急降下を始める。

彼女の持つ大剣を見て、受け止めるのは難しいと判断した萃香は後方に飛ぶ事で、その一撃を避けてみせる。

フランドールの大剣が大地とぶつかり合う瞬間、辺り一面に炎が走り、同時にけたたましい音を周囲に響かせた。

「おーやるじゃん」

「何、まだまださー!」

フランドールは地面に刺さった大剣を右手一本で抜き取り、そのまま横一線に薙ぎ払った。

萃香は先程同様に後方に飛ぶ事で大剣の直撃を避けるも、その大剣から飛び出してきた光球の嵐に不意を突かれ、そのまま巻き込まれてしまう。

体勢が整っていない事もあり、濃密度の弾幕が次々と直撃していった。

「効くかこんなもん!」

萃香は自らも全方位に弾幕を放つ事で、フランドールの弾幕を相殺しにかかった。

萃香の目論見通り、殆どの弾幕はお互いのそれによって消滅する事となった。

フランドールは自らが放った弾幕が全て掻き消されたのにも関わらず、殆ど気にしてはいない様子を見せる。

彼女は持つていた大剣を消し、萃香に向かって駆け出した。

本来であれば読み易いはずの直線的な動きながらも、彼女の持つ速さはそれすらも意識させないものであった。

萃香は牽制の為、始めに作った光球を、大きさは小さめではあるがいくつか創り出しフランドールへと放り投げた。

しかし、フランドールの持つ圧倒的な速さによって殆どの物が直撃する事なく、彼女が既に通り過ぎた地点へと着弾していく。

そんな中、たった一つだけがフランドールの姿を捉えていた。

そしてそれがフランドールに直撃する瞬間、彼女に触れる事無くその身を炸けさせた。

「っ！　またかー！」

フランドールは立ち上る砂煙を物ともせず飛び出し、大振りの拳を放った。

萃香は咄嗟に両腕でフランドールの一撃を受けるも、その勢いを完全に殺す事は出来ずに踏ん張る足で地面を割りながら後退を余儀無くされる。

常人が受ければそれだけで消し飛ばされてしまう様な一撃だっただろう。

しかし、鬼である萃香の耐久力は並外れた物である。

全くと言って堪えた様子は無く、フランドールに向かって余裕の笑みを浮かべていた。

「頑丈だねえ。本気で殴ったつもりだったんだけど」

「悪くは無いいけど、まだまだ軽いね。そんなんじや私は倒せないよ？」

「そうね。じゃあ本気で壊しにいかうかしら」

「やれるもんならやってみな！」

フランドールの放つ佇いが先程とは明らかに変わったのが分かった。

確実に奥の手を存分に振るい始めてくる。

萃香はフランドールに向かって挑発をしてみせたものの彼女に対する警戒をより一層強める。

此方から先に仕掛ける事にした萃香は、切り札の一つを使う事に決めた。

鬼符「ミツシングパワー」

突如として萃香の身体が巨大化し始める。

「わぁ」

500年程生きてきた中でも一度も見た事が無い光景が目の前に広がっていく事に、フランドールは口を開けながら呆然と眺める事しか出来なかった。

萃香の巨大化が終わった時、フランドールの目の前に広がる物はまさに壁そのものであった。

「こんなに大きい姿の妖怪なんて初めて見たわ」

萃香は未だ呆然としているフランドールを見下ろしながら、その巨大な拳を彼女に向けて振り下ろした。

拳が落ちて来る事で起こる風切音は轟音と化し、周囲に吹く風もまた暴れ始める。

それでも、フランドールは振り下ろされる拳を前にしても冷静な表情を保ったまま一

歩も動く事はしなかった。

「でも、私には何の意味も無いわ」

フランドールが自らの右手を握り締める。

「ぐっ!？」

振り下ろした腕が一瞬にして四散した。

本来の形を失った肉片は霧となり辺りに舞い始める。

その光景を萃香は冷や汗をかきながら見守っていた。

「あ、危なかった……」

萃香は、フランドールに自らの拳が当たる瞬間、唐突に悪い予感を感じ、自身の能力である密と疎を操る程度の能力を用いて腕にあった密度の殆どを移動させたのであった。

片腕の大半は破壊されてしまったものの、その中身は空である為に萃香自身は殆どダメージを受ける事は無かった。

「ただ、タネは掴んだぞ……」

しかし、あの一瞬の内に萃香はフランドールの行動をしっかりと注視していた。

その結果、萃香はフランドールの今までの破壊行為が手を握る事が引き金となっていた事に気付く。

更に、先程腕を破壊された事でフランドールの能力は飽くまでも形有る物、固体を壊す事に限られるという事が分かった。

その証拠に、破壊された腕は消失した訳ではなく、形を成さなくなったただけでしつかりと存在している。

「要は、今度はこつちが奴の腕を壊しちまえば良い訳だ」

萃香は巨大化を止め、元の姿へと戻る。

「あら、もう止めちゃうの？」

「何、良い方法が思いついたもんだからね」

そう言つて萃香は不敵な笑みを浮かべて見せた。

「良いねえ、楽しみだわ」

フランドールも萃香の笑みに応えてみせる。

そして、魔力を集中させ何処からともなく3人の分身を出現させる。

禁忌「フオーオブアカインド」

四人のフランドールは萃香に向かって全速力で突っ込み始めた。

「あれま、こんな事も出来るのか」

フランドールの多彩な引き出しに感心しながらも、萃香は、向かってくるフランドール達へと構えた。

フランドール達は四方に別れ、それぞれ異なった方向から萃香を狙い始めた。

前後左右、立体的かつ変則的であり本来の四倍ともとれる猛攻が萃香に放たれていく。

かく言う萃香はそれらの攻撃に、受け止め、捌き、そして合わせると言った風にして全てに対応している。

「吸血鬼風情が鬼に正面から敵うと思うな！」

萃香は前後方に居るフランドール二人のストレートを掴み、一気に引き寄せる事で二人を衝突させる。

更に、掴んだ腕を離さず、そのまま振り回す事で左右に居るフランドール二人も薙ぎ払った。

小さく呻き声を上げながらフランドール達は体勢を整えようと空中で静止する。

萃香は、そのフランドール達の行動をも読んでいた様で全方位に向かつて濃密度の弾幕を放った。

完全に体勢が整っていない状態で静止を決めたフランドール達は、当然の如く弾幕に飲み込まれてしまう。

度重なる弾幕の直撃により、三人の分身が消滅する。

残ったフランドールもかなりの痛手を負ったらしく、普段の様相からは想像もつかない

いほど厳しい表情をしている。

これを好機と見た萃香はフランドールへと全速で突っ込み始めた。

かく言うフランドールも萃香に向かって右手を突き出し、今にも握り締めようとしている。

「今だー！」

萃香は自身の体積を極限まで広げることで霧となり、自らの形を完全に失わせる。

「……目が消えた？」

現状を飲み込めていないフランドールはほんの僅かな時間ではあるものの動きが硬直してしまふ。

萃香はその隙を見逃さず、直ぐさまフランドールの背後に回り込み、自身の姿を取り戻す。

「しまっ」

フランドールが振り向く間も無く、萃香は二つの光球を創り出し、フランドールの両腕目掛けて爆発させた。

熱と光の暴動によって弾き飛ばされたフランドールは、空中で乱回転を繰り返しながら自らの両腕の殆どが吹き飛ばされている事に気付く。

「やられた。これじゃ目が潰せない……」

一旦距離を取ろうと暴れる体制を無理矢理整え、爆発の勢いをそのままに更に加速を始める。

「そりゃ、悪手だよ」

フランドールが声が出た方向を探し、それが自分の下からである事に気付いた瞬間、目の前の地面が割れ、巨大な萃香が姿を現した。

「そんな無茶苦茶な」

「それをやってのけるが私なのさ」

萃香の巨大な手がフランドールへと迫る。

フランドールは先程一気に加速を決めた分、直ぐには止まる事が出来ず、そのまま萃香の手中の中に収まってしまった。

そのまま地面に向かって鉛直に投げられ、フランドールが叩き付けられた大地が轟音と共に一瞬にして陥没を起こす。

彼女はその後もしき上がれずに暫くの間地に背を付けたままであった。

「降参か？」

「ええ降参。全身の骨がバツキバツキよ。今は身体治すのに精一杯でもう煙も出ませんわ」

フランドールの言葉を聞き、萃香は元の大ききへと戻っていく。

小さくなったのにも関わらずそれでも萃香がフランドールを見下ろす構図が変わっていない事は萃香が完全に勝利した事を意味していた。

「見ての通り、私は暫くは動けない。煮るなり焼くなり好きにすればいいよ」

フランドールは半ば諦めた様な声を萃香に向けて発した。

その言葉を聞き、萃香はフランドールに向かって満面の笑みを浮かべてみせる。

「じゃあ、私の第二の用事に付き合つて貰おうか」

「あーそういえば喧嘩と酒とかいつてたもんね」

「そう、次は酒だ。喧嘩の後は取り敢えず酒を呑み交わすもんだからね」

「いいけど、何処で呑むのよ？ 此処とか？」

フランドールの疑問に、萃香は自信を持った表情を彼女に見せる。

「人里に行くのさ」

「え？」

フランドールは本日二度目である、開いた口が塞がらないという事態に陥った。

第一次鯨吞亭アルコール大戦

フランドールの身体が治り切る頃には、既に夜が顔を覗かせていた。

空は未だ晴れぬままではあったが、ほんの僅かではあるものの太陽の残滓がこの地を辛うじて照らしている。

それは人の生きる世界が終わるまでの猶予の様であった。

しかしそれも直に終わる。

そうして世界が人外の物に切り替わった時、彼女の身体は息を吹き返した。

「お、動けるようになったか」

身体を起こしたフランドールに掛けられた声は、萃香のものであった。

萃香は、待ちくたびれたぞと嫌味を言いながら微笑みを向ける。

喧嘩という萃香にとつて最大限の娯楽が終わってしまった後も、彼女は律儀にフランドールの復活を待っていた。

殆どの時間が沈黙であったが、それでも萃香は穏やかな表情を崩さずに、フランドールの横に座り続けたのだ。

最も、その喧嘩と同格の娯楽に付き合わせようとしていたからなのだが。

「まあ辛うじてね。煙くらいは出るまでには回復したわ」

「じゃあ問題ないね。さあ、私に付いて来てもらおうか」

その声と共に萃香は立ち上がり、釣られてフランドールも同様の行動をとる。

ふとフランドールは何気なしに辺りを見回してみた。

今日は珍しく虫の声すらも聞こえない。

何も無い無音は、彼女達が一際大きい存在感を放っている事を気付かせる。

それは世界がこの2人だけの物になってしまった様な錯覚をも引き起こさせた。

フランドールはあり得ない瞞しだと笑って消し去り、萃香の後を歩いて歩みを始めた。

人里までの道中はやはりと言って無言が続き、これといった会話は殆どと言ってなかった。

それでも二人に気まずさは感じられない。

お互いに、交わす言葉は酒の席までとっておこうという思いだったのかもしれない。

そんな穏やかな静寂を掻き消す様にして、周囲には2人が地面を踏みしめる音が響いていた。

「お、見えてきた見えてきた」

萃香が後ろへと振り返り、フランドールを見ながら前方へと指を指す。

指された方角へフランドールが目を向けると、ぼつぼつと淡い光が浮いている事に気付く。

夜目を利かせてそれを見やると、そこには数多くの家々が存在していた。

「あれが人里？」

「そうそう。あ、一応正体は隠さないといけなからその羽は仕舞っておけよ。

羽織る物は貸してやるからさ」

萃香は、何処からともなく変装用の衣服を取り出してみせる。

フランドールにとっては見慣れない物であったが、人里においての勝手が分からない以上萃香に従うしか無く、大人しく受け取る事にする。

色々と指示を受けるのは面倒であったが、人里には興味があった事もあり、それを思えば我慢出来た。

「よし、じゃあ行こうか」

全ての準備は整い、後は人里に入るだけであった。

興奮と期待がフランドールの思考を支配していく。

人間が集う場所。飲み物の形でしか人間を知らなかった彼女にとってこの場所は、人間がどのような営みをするのかを知る事ができる、格好の研究対象であった。

フランドールは、薄く笑みが溢れながら萃香の言葉に頷いてみせた。

「ふうん、こんな風になつてるのねえ」

フランドールにとつて、見渡す限り全ての光景が新鮮であつた。

博麗神社などと同じ様に木材を用いて建てられているのは分かるが、それが道を挟んできつちりと横一列に並んでいる。

一軒家自体は見慣れたのだが、如何せん数が多い。

更に、建物其々が別の役割を持った場所であるのだから、彼女の興味が飽きるかとは無かつた。

「ほら、あんまりきよろきよろするなつて。怪しまれちゃうぞ?」

「ん、これは失礼」

フランドールは、つい我を忘れて見入つてしまつていたが、萃香の指摘で目を覚ました。

自分らしく無いと、少々照れながら自らを戒める。

「ほら、着いたよ」

ある場所の前で萃香が足を止め、フランドールに呼び掛けた。

彼女が足を止めた場所を見ると、一つの看板を見つけた。

「げいどんてい……?」

「そ、鯨吞亭。今日は早めに店を閉めてもらったからな。思う存分私らで呑めるよ」

萃香は、やつと酒が呑めると上機嫌で店へと入っていく。

フランドールも彼女に続いて店へと入る事にした。

「……わあ」

これまた見た事のない光景だった。

とは言っても飲食店の内装自体知らなかったので当然ではあるが。

調理場を囲むようにして客席が並ぶ。

萃香は既に席についており、彼女に促される様にしてフランドールも隣へ腰を下ろす。

「ほら、これに書いてあるやつから好きな物頼みなよ」

そう言つて萃香はフランドールに、一つの紙を渡す。

お品書きと書かれたそれには見慣れない料理の名前ばかりが載っている。

「……全然知らない名前の料理ばかりね」

「あれま、これとか知らないのかい?」

「今まで洋食ばかり食べてたから、和食なんて本当に有名な物しか知らないのよ」

「ふーん、じゃあ私が適当に頼んじやうよ。鬼が食べられない物は吸血鬼だって食べら

れないだろうし多分大丈夫でしょ」

フランドールはそれに同意し、取り敢えずは彼女に任せる事にする。

暫くの間暇な待ち時間が出来てしまい、フランドールは久し振りの退屈と再会した。

そうして、萃香があれこれ悩みながら決めかねている姿を何の気無しに眺めていると、奥から何者かの声が聞こえてきた。

「注文は決まりました？」

声が出た方に顔を向けると、其処には一人の少女が、此方の様子を見守っていた。

「あーうん、取り敢えずいつものやつ貰おうかな。初めての奴もいるし」

萃香は親指でフランドールを指しながら、その少女に向かって注文を頼んでいた。

少女はそれに対して気持ちの良い返事をした後に、直様調理に取り掛かってみせた。

「ん？」

ここでフランドールは少女に対して違和感を覚えた。

見た目は特に普通の人間と変わらないのだが、それでも何処か人間とは違った匂い、雰囲気と言うべきか、そういった何かを感じたのだ。

妖怪であれば、人間の持つそれとは明らかに違う為、直ぐに明確に分かってしまう。

しかし、この少女の持つものは妖怪と呼ぶには余りにも不明瞭で、人間との差異が少な過ぎた。

それはもうフランドールの好奇心を擽る以外の何者でもない。

彼女はその少女に向かって率直に疑問をぶつける事にした。

「ねえ貴方、人間じゃないんでしょ？」

唐突に疑問を投げ掛けられた少女は、忙しく動いていた調理の手を止め、フランドールの方をちらりと見やった。

「やっぱり分かる人には分かっちゃうんですね。そう、私は人間ではありません」

「あ、やっぱり。でも妖怪にしてはなんか違和感が有るのだけだよ」

「ああそれはねえ、こいつは自分に対しての認識を邪魔出来るみたいなんだよ。はつきりしないで違和感に留まっているのは多分そのせいさね」

フランドールの持つ疑問に答えてみせたのは萃香だった。

彼女も少女が人間でない事は既に知っており、事の詳細も把握している様であった。

「ふーん、じゃあ貴方は妖怪って事でいいのね？」

「ええそうです。私はこの鯨吞亭の座敷童子、奥野田美宵です。まあそつちの鬼の方からは酔魔って呼ばれてますけどね」

さて、と一言置いて美宵と名乗った少女は再び調理の手を動かし始めた。

一定のリズムを刻む包丁の音、肉が焼かれる音や品物を盛り付ける音など様々な物が店内に響く。

何故だかフランドールにとってそれはひどく心を落ち着かせてくれるものであった。心地良い響きと香りに包まれ、彼女は自らの顔が綻んでいくのを感じる。

彼女は、料理の過程を楽しむのがこんなにも安らぐものであったとは知らなかったと一つ意外に思いながら、またその雰囲気にも没頭し始めた。

普段の彼女は紅魔館の調理場になど一切顔を出さず、完成までの工程など全くと言って知らなかった。

それ故に彼女にとって料理の過程を見るのは初の出来事であったのだ。

フランドールは、今度帰った時には咲夜の調理現場でも覗いてみるかなとそんな事も考えていた。

「おい先に酒飲んじやおうよー」

萃香がとうとう我慢出来なくなったようで、美宵に酒を持ってくる様に催促をし始めた。

「はーい、焼酎でしたよね」

「そうそう、分かってるねー」

美宵が何瓶もの酒を取り出し、二人の前へと差し出してくる。

それを萃香が嬉しそうに手に取り、盃に注いでいく。

盃から溢れんばかりに溜まったその酒を萃香は一気に飲んでみせた。

「あくやっぱり喧嘩の後は酒だよなあ」

萃香は、満たされたあの戦いの余韻に浸りながら、自らの身体に酒を染み込ませていく。

それはまるで幽玄という名の海を酒で置換しようとしている様であった。

まさに酒で溺れるという言葉そのものを体現する行為である。

萃香は気分が乗ってきたのか、親切にフランドールの盃へと酒を注ぐ。

フランドールはそれをまじまじと見つめながら、萃香と同様にしてそれを呑み干した。

喉が痛い。なんだこれは。

喉への強烈な刺激に驚愕を覚える。

しかしそれは初めの内のみで、少ししたらその刺激にも慣れてくる。

ただ慣れてしまえばこっちの物である。

余裕がでてくると、フランドールは酒の味を楽しめるようになっていった。

意外とイケると、呑めば呑むほど更に酒が進んでいった。

すると、そういえばと、美宵が萃香へと話題の提示を始めた

「さっき喧嘩って言っていましたけど、誰かと口喧嘩でもしたんですか？」

「いや、普通に殴り合いだよ」

「え、鬼と殴り合うなんて、そんな命知らず居るんですか!？」

「うん、こいつ」

そう言つて萃香はフランドールへと目を向けた。

美宵は信じられないといった表情でフランドールを見つめていた。

「えーと、鬼が連れてくる位だから妖怪だとは思つてたけど、まさか殴り合いまでしてるなんて……貴方は一体……?」

「あら失礼。私はフランドール・スカーレット、その紅い館に住む吸血鬼ですわ」

吸血鬼と聞いて美宵の顔が納得したものになった。

「ああ……吸血鬼でしたか。吸血鬼なら鬼とまともに喧嘩できてかつ生きてるっていうのに納得が出来ますね」

「そうだねえ、私も久しぶり楽しめたからな」

「それで、どっちが勝ったんです?」

「そりゃあ私だつて。吸血鬼には負けらんないしね」

自信満々と言つたドヤ顔を萃香はフランドールに向けてきた。

明らかに馬鹿にされているのは分かるが、それでも負けは負けである為に言い返せない。
い。

フランドールは旅に出て初めて、屈辱と怒りを覚えた。

「はあ……こうも馬鹿にされてると流石に腹が立つのだけれど」

「ああ悪い悪い。まあ事実だし」

萃香はフランドールの怒りを軽く流し、更に煽りを加えてくる。

普段のフランドールならこれくらい口の撃は簡単に躲してみせるのだが、喧嘩での疲れと酒が入っている事により、冷静な思考ができなくなってきた。

「煩いわねえ。気に入らないからもう一回勝負よ」

「お、いいねえ、そうかなくちや。じゃあ呑み勝負つてのはどうだ？」

「え、ちよつとそれは……」

「良いわ。受けてあげる」

「ちよつと！ それお店が潰れちゃうって！」

美宵の叫びも虚しく、二人は勝手に勝負を始める事に決めていた。

伊吹萃香 vs フランドール・スカーレットの第二回戦が今まさに始まるうとしていた。

「きゆう……」

「なんだもうダウンか。こっちはまだまだ余裕だぞ?」

およそ2時間における死闘。

運ばれてくる料理をつまみながら、二人は兎に角酒を流し続け、そしてとうとうフランドールは限界を迎えた。

鬼相手にかなり健闘した方だと思われるが、それでもやはり鬼には全くと言って敵わなかった訳で、完全に伸びてしまっている。

「うう……むにゃむにゃ」

「なんだこいつ、随分可愛らしい寝言言ってるよ」

美宵は、辛うじてこの店が持ち堪えた時に安堵の念を示し、この二人が同時に店に入るところを禁止にしようか本気で考える事にしていた。

「さて、今回の勝負も私が勝った訳だが」

「えーと、どうかするつもりですか?」

美宵の疑問が萃香に投げ掛けられる。

彼女の言葉を聞いた萃香は、妙に怪しげな笑顔を浮かべ始めた。

「ふふふ、どうすると思う?」

それは妖精が何かを企んでいるのと同じ様な、悪戯心満載の笑みであった。

美宵は、その顔に少しばかりの戦慄を覚え、これからフランドールに起こるであろう

惨事に心の底から同情する事を決めた。